

ブハラのコシュベギ官房文庫研究序説

M. A. アブドゥライモフ
(小松久男訳)

訳者まえがき

本稿は、ウズベキスタンの代表的な東洋学者の一人、故アブドゥライモフ教授(1916-75)の表題論文(未公開,ロシア語)を訳出したものである¹⁾。これは本文にあるとおり、ブハラ・ハン国の末期にそのコシュベギ qoshbegi の官房、つまり宰相府に集積されていた文書の概要を初めて紹介した労作であり、これまでほとんど知られていなかった中央アジアの古文書史料の状況を知る上で有益な情報を提供している。ヒヴァやコーカンド・ハン国の文書についてはすでに研究があるが、文書行政がもっとも発達していたと思われるブハラの古文書は、長らく知られぬままに残されていた²⁾。有名なオスマン朝の古文書フォンドには規模において遠く及ばないにしても、この文庫に含まれる文書は、19世紀後半から20世紀初頭に至るブハラ社会の実像を雄弁に物語っており、これらが中央アジア史研究にとって第一級の史料であることは一見して明らかである。中央アジア現地での研究、調査が可能となった現在、こうした情報はより広く共有されるべきであろう。あえて、拙訳を試みた次第である。

さて、訳者がこの未発表原稿を見ることができたのは、1991年夏タシュケントを訪問したときにお会いしたアブドゥライモフ家の方々、ならびにウズベキスタンの文芸誌『東方の星』Shārq Yulduzi の編集部主任 A. アブドゥラーエフ氏のご好意による。以下、氏のアブドゥライモフに関する論説記事に依拠しながら、この貴重な労作がなぜ未刊に終わったのかを含め、歴史家アブドゥライモフの経歴を簡単に記しておこう³⁾。

アブドゥライモフは、レニングラードの東洋学研究所でペトルシェーフスキーに師事し、4年間の従軍(この間に彼は兵卒から大尉に昇進し、赤旗勲章を授与されている)の後、1948年に修士論文「ティムールとトクタミシュ」で博士候補の資格を得た。論文審査にあ

たったのは、A. Yu. ヤクポーフスキーである。翌年タシュケントの中央アジア大学(現タシュケント大学)に東洋学部長として赴任したが、彼の研究テーマは、当時のソビエト史学においては「危険な」テーマであった。彼の修士論文は、ティムールがモスクワの脅威、金帳汗国のトクタミシュを1395年に破ったことが、ロシアの運命にどれほど大きな影響を与えたかを論証していたが、それはロシア史の栄光、クリコヴォにおける金帳汗国に対する勝利(1380年)を色あせたものにしかならなかった。彼のアプローチは、ロシア中心史観を採用したソビエト史学にはなじまなかったのである。彼は1952年大学を追われ、閑職に退けられた。反対派がアブドゥライモフを、「民族主義者ジャディードの残存分子と語らって、ソビエト青年を排外的民族主義に教唆した」と告訴したからである。かつてのマドラサを出た教養人を東洋学部生の指導にあたらせ、アラビア、ペルシア語の教授と写本読解の訓練を進めようとした彼の計画は挫折した。論文の公刊は論外であり、これに言及することも禁じられたという。

学究生活を続けるためには、研究テーマを変えなければならなかった。1964年、彼は「16世紀末から19世紀前半のブハラ・ハン国における農業関係」で博士号を取得した。ブハラのコシュベギ官房文庫に関する研究は、その延長線上に来るものであり、本文にもあるとおり、1965年から1973年にかけて古文書局の研究員とともに、およそ9万点の文書からなるこの文庫の分類整理にあたった。そして、この作業を終えた後で、アブドゥライモフは長大な序文を付したコシュベギ文書集を編集している(未公刊)。本稿はこの序文とは別に、単独の紹介論文として準備されたものと思われるが、それがいつ執筆されたのかは不明である。いずれにせよ、晩年のアブドゥライモフには、このコシュベギ文庫の研究がライフ・ワークであったにちがいない。

しかし、この間も彼はティムールとティムール朝に関する学問的な情熱を失わなかった。1960年、彼は「ティムール朝の社会経済史研究について」と題する論文を発表したが、それはティムールの個人的な能力とその建設者としての偉業を高く評価するものであった。さらに、彼は「サマルカンド2500年祭」に合わせ、長年の研究成果をまとめたティムール朝史を書き上げている(未刊)。アカデミー会員I. ムミノフの『アミール・ティムールの中央アジア史上における位置と役割』(1968年)が刊行されたのは、ちょうどそのときのことである。ウズベキスタンにおけるティムール研究の第一人者を自負するアブドゥライモフは、この「ディレクターの著作」に手厳しい批判を加えた。これによって自著を世に問う機会が生まれると考えたのかもしれない。しかし、その希望はかなわなかった。

1970年代の初め、東洋学研究所の部長職にあったアブドゥライモフは、再び所内のス

キャンダルに巻き込まれ、その職を解かれた。ウズベク史研究で知られるアフメドフもこのとき降格処分を受けている。アブドゥライモフには、その後も厳しい日々が待っていた。1973年、連邦中央の雑誌『ソ連邦史』に寄稿した論文、「ティムールおよびティムール朝について1960年代にウズベキスタンで刊行された文献概観」⁴⁾は、ウズベキスタンでは大方の不評を買った。そこではティムールはもはや偉人ではなく、前記のムミノフを筆頭におよそティムール個人とその活動を肯定的に評価した研究には、仮借ない批判が浴びせられていたからである。しかし、この投稿によってアブドゥライモフはウズベク学界の中で孤立を深めることになった。アブドゥライモフの研究に発表の機会が与えられなかったのはこのためであろう。そこでは研究の内容とは無関係の判断が働いたにちがいない。アブドゥライモフもまた、政治とイデオロギーに翻弄された旧ソ連の歴史家たちの一人であった⁵⁾。

アブドゥライモフがこの原稿を書いた後、すでに20年近くが経過している。とりわけ、ペレストロイカ以後、ウズベキスタンにおいても中央アジア近代史の見直しは著しい。アンディジャン蜂起やジャディードなどに関する彼の議論は、もはやウズベキスタンにおいても定説ではない。しかし、アブドゥライモフの真価は、その経歴をみても近代史研究ではなく、むしろ文書研究に発揮されたのではないだろうか。拙訳の目的もまた、貴重な文書史料に関する忘れられた労作を紹介することにある。

アブドゥライモフの原稿は、ダブル・スペースで46枚の用紙に浄書されているが、中には意味の不明な部分やタイプミス、改行の疑問なところも散見される。著者はなお手を入れるつもりであったのかもしれない。[]内は訳者の補足であり、訳者の判断で行った改行の変更は//で示した。単純なタイプミスは、断りなく訂正した。また、著者は固有名詞やタームについて厳密な転写を行っていない。原則として、地名はカナ表記とし、人名とタームは通常のアラビア文字転写法に従って表記することにした。ただし、原綴の不明な人名やよく知られているタームはカナ表記とした。

注

- 1) 原題は、М. А. Абдураимов, Вступление к изучению “Архива канцелярии бухарского кошбеги”。この遺稿の公刊については、教授の子息 Khatām Ābdurāimov 氏の許可をえた。
- 2) Академик В. В. Бартольд, *Сочинения*, Т. 8, Москва, 1973, стр. 356-357.
- 3) А. Ābdullaev, Achilmāy qalgān hāqiqāt, *Ozbekistan ādābiyati va sən’ati*, 1990/12/14 (No.50), p.5. アブドゥライモフの経歴と業績については、В. В. Лунин, *Биобиблиографические*

очерки о деятелях общественных наук Узбекистана, Т. 1, Ташкент, 1976, стр. 20-22も参照。

- 4) М. А. Абдурайимов, Обзор литературы, посвященной Тимуру и Тимуридам, изданной в Узбекистане в 60-х годах, *История СССР*, 1973, No. 5, стр. 83-90.
- 5) Абдурайимовの修士論文は, アドゥッラーエフ氏の尽力により最近ようやく刊行された(ウズベク語)。M. Äbduräimov, Temur vä Tokhtämish, *Shärq yulduzi*, 1991, No. 11, pp. 139-160.

「ブハラのコシュベギ官房文庫研究序説」

M. A. アブドゥライモフ

中央アジア諸民族の歴史をより深く研究する上で、文書史料のもつ重要性は論をまたない。叙事的な史書の意義や重要性をおとしめるつもりはないが、その多くは(すべてではないにせよ)宮廷史家や封建領主の弁明者によって執筆され、しかもしばしば領主たちの要望で書かれていることを指摘しておこう。たしかにこれらの史書は、とりわけ軍事遠征、封建戦争や内紛などに注目しながら、政治史の流れをかなり詳細に描き出している。しかし、民衆の歴史、経済の実情、勤労大衆の境遇や搾取の性格と形態、さらにその他、社会・政治史や文化、生活慣習など、実に多くの問題が通例これらの史料ではほとんど明らかにされていないのである。

したがって、中央アジア諸民族の歴史を学問的に再構成しようとするれば、それは他の歴史資料とならんで文書史料を広範に駆使することによってはじめて可能となる。すでに今世紀の初め、アカデミー会員のバルトリドはその小さな報告の中で次のように強調していた。「住民の日常生活用品であれ、あるいは公文書、碑文、貨幣など何であれ、過去の物的な遺品の発見がある限り、それが諸国史の解明に寄与することは言うまでもない」¹⁾と。また別の、あまり知られてはいないが重要な論文の中で、バルトリドはこう指摘している。西洋史研究者と比べて東洋史研究者の抱えている大きな困難は、叙事的な史料の他に、当該社会の内実を描いた文書史料を利用することができないということである。このような史料はこれまでのところ例外的に得られたにすぎない。その大部分は消失して今日には伝えられず、研究者には知られずじまいとなっている、と。彼は、(中央アジアのロシアへの併合の後ですら)ウズベク諸ハン国の文書史料がいかなる運命をたどったかについて、こう述べている。「ハンのヤルリクやベクたちのハンへの上奏文などの文書集は、今日でも私的な個人の手もとにあり、ハンの文庫所蔵の文書が個人の手に渡ることも珍しくはない。ロシアによる征服以前のトルキスタンの歴史に関する文書は、より後代に作成された文書に劣らず、研究者の注意を引いてしかるべきである」²⁾と。碩学は

また、その当時すでに正しくもこう指摘している。「これまでの研究対象はわずかに一種類の文書、すなわちいわゆるワクフ文書で、それも唯一サマルカンド州のものに限られており、しかもそれに含まれている歴史地理的な資料が注目されたにすぎないのである」³⁾と。

文書類はしばしば文学作品として、あるいは東洋古文書選として集成、出版された⁴⁾。しかし、いわゆるイスラム世界におけるこれまでの官撰史学の中に、古文書から直接引き出された史料に依拠した歴史叙述の例を見いだすことはできない⁵⁾。

バルトリドはまた別の論文で文書史料の重要性について論じ、それが中央アジアの農業をめぐる社会・経済関係や農業の発展、土地所有などの諸問題を研究する上できわめて重要であることを指摘した。彼はこう述べている。「われわれは中央アジアの農業史についていかなる文書も持っておらず、史家や地理学者、旅行者などが与えてくれる断片的で偶然の情報に満足するしかないのである」⁶⁾と。

しかし、バルトリドの死後、状況は大きく変わった。30年代の初めから文書史料の領域で大きな発見が相次いで起こったのである。発見された文書は、I. Yu. クラチコフスキーが指摘しているとおり、古代から19世紀まで、年代的にはあらゆる時代にまたがっていた⁷⁾。

もっとも重要な発見は、タジキスタン北部のムグ山における発見である。1933年、ムグ山城(Qal'a-yi Mug)の廃墟において、棒や皮、紙などにソグド語およびアラビア語で書かれた76点のソグド文書が発見された。その翌年にはこの発見に寄せた特別の論文集が刊行され、これには A. A. フレイマンによる初めての簡略なソグド語文書目録と V. A. クラチコフスカヤおよび I. Yu. クラチコフスキーによるアラビア語文書の研究が載った。彼らは、文書の作成時期を8世紀初頭に比定するとともにその作成地をも確定した⁸⁾。ジューイバル・シャイフ家⁹⁾やヒヴァ・ハン¹⁰⁾、コーカンドのフドヤル・ハン文書¹¹⁾の発見と研究、O. D. チェホーヴィチ¹²⁾、R. N. ナビーエフ¹³⁾、R. G. ムクミーノワ¹⁴⁾、そして筆者¹⁵⁾などによる中央アジア史関係の文書類の刊行と研究、また I. P. ペトルシェーフスキーによるイランとザカフカース地方の歴史に関する一連の貴重な研究は¹⁶⁾、上述の地域における封建社会の歴史研究に根本的な修正をもたらすことになった。

文書史料の領域において並外れた位置を占めているのが、V. L. ヴャトキン¹⁷⁾と A. A. セミョーノフ¹⁸⁾の研究である。ヴャトキンは、まさにこの文書史料を用いて有名なウルクベク天文台の位置を捜し当てた。彼の功績は歴史的な発見として全世界から賞賛されたものである。

30年代における真に学術的な発見として忘れることができないのは、不慮の死を遂げたムサジャン・サイジャノフ教授の研究である。彼はウズベク古遺物保存委員会(Uzkomstaris)の初代議長であり、V. L. ヴャトキンやアカデミー会員 M. E. マッソンなどのような優れた研究者と協力して豊かな成果を上げた。30年代にサイジャノフは、13世紀の著名なシャイフ、Sayf al-Dīn Baharī のマザールでワクフ文書を発見することに成功した。これは、1326年(1333年に補足)にブハラ近郊のファトハバードでシャイフの孫 Īshān Yahyā によって遺言された文書である。それは、長さ48m70cm、幅44cmという巨大な文書であり、文言は1400行を数える。モンゴル支配期のマーワラーアンナフルでは歴史書も文学作品も一つとして書かれなかったことを想起すれば、サイジャノフの発見はソビエト東洋史学に計り知れない意義を持っていることがわかる。彼は死の前の年、1936年にその研究を「Shaykh Sayf al-Dīn Baharī のワクフ・ナーメ」(ウズベク語)としてまとめた。彼はこの著作でより後代(16-19世紀)に作成され、農業関係の諸問題に関わるおよそ30点の重要な文書を引いている。これにはまた興味深い注と用語集とが付されていた。しかし、残念なことにサイジャノフの著作はついに陽の目を見なかった。それは長くマルクス・レーニン主義研究所タシュケント支部の古文書室に眠り、昨年ようやく筆者がこれをウズベク共和国中央国家文書局に移管させたところである¹⁹⁾。

われわれの知るあらゆる文書の中でも、その内容からして学術的に見て貴重な存在と言えるのが、「ブハラのコシュベギ官房文庫(1865-1920)」(以下、コシュベギ文庫と略記する)である。コシュベギ文庫は、所収文書の数量からしてもまさに研究の宝庫であり、わが国において第一等の地位を占めている。しかし、残念ながらこの文書集は最近に至るまで調査も研究もなされずにきた。これまでわが国の多くの優れた東洋学者や歴史家が、このウズベク共和国中央国家文書局に残る豊かな(あらかじめ述べておけば、この фондはおよそ9万点の文書からなっている)文化遺産の研究がどれほど切実なものか提案をしてきたが、手は届かなかったのである。

1965年、筆者は古文書局主任研究員カリム・ウバイドゥッラーエフ、研究員アンジェラ・ババヤンツとともにコシュベギ文庫のいわゆる全体登録に着手し、1973年夏に一通りの作業を終えた。現在、「ウズベク共和国中央国家文書、歴史部門、 фонд126号、目録番号1, 1865-1920年」と命名されたコシュベギ文庫は、研究者が利用できるようになっている²⁰⁾。文書のマイクロフィルム化も完了している。しかし、困難な作業はなお長く続くことであろう。この文書類が教養も筆跡も異なる何百人もの人々によって作成されたことを考えるならば、目録作成者の前にどれほど大きな困難が立ちはだかっているかは、

容易に想像することができるであろう。文書を覆っている数世紀来のほこりについては言うまでもない。もちろん、文書のサイズもまた一様ではない。全部で一葉のものもあれば、また数メートルもの大型紙に書かれて束になったものもある。文庫の形成は公的には1865年、つまりマンギート朝のアミール Muẓaffar(1860-1885)の治世に始まる。文書の大半は19世紀後半のものである。しかし、これらと並んで、コシュベギ文書の中にはより以前の中央アジア史や文化史に関する多数の貴重な文書が残されている。いくつかのヤルリクやワクフ証文は、13世紀の末から14世紀初頭のものである。この種の文書類は、われわれの手ですでにフォンド323号に移されている²¹⁾。

ブハラ人民共和国の時代[1920-1924年]に教育と文化の領域で活動し、コシュベギ文庫の存在をよく知っていた権威ある元公務員の証言によれば、かつてのブハラ・ハン国には二つの文庫があった。一つは最後のブハラ・アミール、‘Abd al-Aḥad(1885-1910)および ‘Ālimkhān(1910-1920)の私的な文庫で、もう一つがコシュベギ文庫である²²⁾。両文庫とも1920年の革命で著しい損害を被った。アミールたちの私的な文庫の運命は、いまだに明らかではない。コシュベギ文庫の方は、長くブハラの図書館や博物館に保管された後、1935年にウズベク共和国中央国家文書局の所管となった。しかし、それはかつてのコシュベギ文庫のすべてではなく、多くの文書が火災のために紛失ないし焼失したものと思われる。「革命の勝利とブハラ・アミールの逃亡の後、王城 ark では火災が発生し、それは4日間続いた」²³⁾からである。//

周知のとおり、ブハラ・ハン国では語の完全な意味において、国家の統治は、内政と外交政策、徴税システム、財政、国土の保安維持、軍隊の指揮、そしてその他すべてにわたって、国家の総理大臣にあたるコシュベギの管轄下にあった²⁴⁾。

ところで、“qush”(鳥)と“qosh”(トルコ語の“qosh”, “qor”から出た「本営、宿营地」という二つの語が、アラビア文字で表記すると同一に見えることは注目しておいてよいであろう。学術文献において“qoshbegi”の語が、封建ロシアの主獵官の称号と職務に対応する“qushbegi”と誤って説明されてきたのはこのためだからである²⁵⁾。しかし、ハン国において“kull-i qoshbegi”(総コシュベギ、最高コシュベギ)の官職にあった最高官は、鷹狩とはいかなる関係も持っていない(これは少なくとも、アシュタルハン朝の最後から二番目の‘Ubaydallāh khān(1702-1711)の治世からであり、マンギート朝期(1752-1920)においてもそうであった)。コシュベギはまた、“vazārat panāh”(宰相職の拠り所)の称号を帯びていた。

古ウズベク語(いわゆるチャガタイ語)において、“qosh”の語は軍隊の宿营地、陣営、あ

るいはたんなる停留地(qoshkhāna)を意味しているから、コシュベギは軍隊(qoshun)の司令官と解釈すべきであろう²⁶⁾。現実の権力を持ち、軍事力に裏付けられた官僚こそ、政府の長になることができたのである。コシュベギとハンの狩猟官との間には、いかなる相似もありえない²⁷⁾。1743年、二つの王朝の交代期(アシュタルハン朝の衰退とマンガート朝の権力掌握の時代)に Muḥammad Amīn ibn Mullā Nūrmuḥammad の書いた *Mazhar al-Ahvāl* ([状況の顕現])なる無二の著作は、社会・政治史に関わる事実に富んでいるが、“qoshkhāne”あるいはたんに“qosh”という語で何回となく軍隊の宿営地に言及している²⁸⁾。

ブハラ・ハン国におけるコシュベギの権力の大きさは、マンガート朝末期の君主たちが国家の統治にほとんど関わらなかったという事実からも推し量ることができる。彼らは通常、ブハラの外にある離宮に暮らし、首都に立ち寄ることはほとんどなかった。たとえば、アミール ‘Abd al-Aḥad は、13年にわたってブハラの王城には住まず、ケルミーネにある自分の所領で暮らすことを好んだのである。しかし、コシュベギは一切の権力を掌握しながら、あらゆることがらにつき特別の上申書を用いて国家の長たるアミールに報告を行った。アミールの不在に際して、コシュベギは王城を離れる権利を持たなかったことにも注目しておこう²⁹⁾。

ブハラのコシュベギ文庫の文書を検討すれば、これらが作成された環境や状況をより明らかにすることが可能である。われわれの作った目録(手書きの目録)では、内容から検討して文書を可能な限り年代順およびテーマ別に整理することに努めた。もちろん若干の[難解な]文書のために、これにも多大の困難が伴った。文書史料は、以下の10部門に分類されている。

【第1部】 ブハラ・ハン国の行政機構に関する文書(付; 歴史的概観)

[歴史的概観]

ブハラの新しい支配王朝[マンガート朝]の最初の君主, Muḥammad Raḥīm biy atalıq (1752-1758)はその治世の初期, ほぼ確実にアシュタルハン朝の血統には連ならないアラルの主, Shāh Tīmūr sulṭān の息子 ‘Ubaydallāh sulṭān をブハラの玉座につけた³⁰⁾。別のより信頼のできる史料によれば, ‘Ubaydallāh sulṭān は殺害された Abūlfayz khān (1711-1747)の息子で, まだ揺り籠に眠る幼児であった³¹⁾。Muḥammad Raḥīm biy 本人は, アタリクの位とアミールの称号で満足していた。しかし, 1756年 Muḥammad Raḥīm biy atalıq はハーンと宣示された。ここで注目すべきは, この政治的な行為の主導者が軍

隊の指揮官、つまり有力なウズベク氏族の首長たちではなく、官僚や聖職者の代表、商人、さらには手工業者たちがこれを積極的に進めたという事実である。ウズベクの慣行に従ってハーンを白いフェルトの上に載せる儀礼には、遊牧および半遊牧のウズベクたちの代表のみならず、ムスリム聖職者や都市の貴顕、官僚たちの代表も出席した。これに先だって、Muḥammad Raḥīm biy と同じ1756年に殺害された Abūlfayḡ khān の娘との婚儀がとり行われ、これによってハーン家との親族の絆が結ばれたのである。以上のような新しいハーンの前即位儀礼こそ、新王朝の将来の政治的方向を示唆するものであろう。しかし、マンギート朝の次の君主、Muḥammad Raḥīm biy の後継者で伯父の Dāniyāl biy は、ハーンの前即位儀礼をとらず、atalıq の位に甘んじて(1758-1785)、Abūlghāzī(1758-1765)を傀儡のハーンとした。一部の研究者は Abūlghāzī khān のアシュタルハン朝出自を否定しているが³²⁾、現地史料は彼がアシュタルハン朝の王子であったことに何らの疑いもさしはさんではない³³⁾。

しかし、Dāniyāl biy の息子 Shāh Murād(1785-1800)の時代になると、もはや傀儡のハーンを立てることはせず、たんに君主という意味ではなく、カリフの称号、つまり amīr al-mu'minīn(信徒の統率者)の意味においてもアミールを自称した。彼はまたシャリーアの規定を遵守することに熱心であったために、「無垢なるアミール」(amīr ma'sūm)の異名をとったが、その残酷さにかけて彼は中央アジアの専制君主たちの人後に落ちるわけではなかった。したがって、時代が下るとともに、ブハラの前政治体制はハン国ではなく、アミール国と呼ばねばならない。

マンギート朝期になって、ブハラの社会・政治状況はいくつか根本的な変化を見た。まず、ブハラ・アミール国内の分封システムや中央権力に対する遊牧貴族の分離主義的な敵対、個々の部族集団とその有力な指導者たちの独立が根絶された(シャフリサブズに本拠を置くケネゲス部族は除く)。新たな条件の中で、自己の部衆の天幕と武装予備軍とを失った遊牧貴族の役割は旧に復されたものの、中央の国家権力とその官僚たちの役割は主導的なものとなった。そして、不正規の封建的な予備軍に代わり、傭兵[常備]軍団が編成された。これらの新しい社会層こそ、マンギート朝の君主たちがその政治活動において対象としていたものにほかならない。さて、[歴史的概観は以上にとどめ]古文書の内容に戻ることにしよう。

第一部には³⁴⁾、ハーキム(州総督)や amlākdār³⁵⁾、中央国家機関の職員、各州の財務官僚(‘āmilān-i kharāj)、そして首都と州の聖職者たちの任命に関するハーン(アミール)の命令書(manshūre)が含まれている。この聖職者とは、シャイフル・イスラーム、大カー

ディー (qāḍī al-quḍāt, 首都の首席裁判官で、アミール国の全裁判官を従える)、カーディー (裁判官)、軍法官 (qāḍī-yi 'askar)、ライース (公序良俗やバザールなどにおける度量衡の監視人で、その職務は中世の muḥtasib のそれに相当する)、ムフティー (彼らの長老あるいは長は a'lam (学を究めた人) の称号を持ち、フェトワと呼ばれる法的決定の作成にあたる。法学者の総称) などをさす。さらに、聖職者の官称号はサイドの出自を持つ者に与えられた。

第一部にはまた、郡 (tūmān) や村を治めていた地方権力に関する資料が収められている。文書によれば、村民は農村共同体の集会でアクサカル (村の長老) や bābā (地区の長老)、amīn、灌漑水路の管理にあたる mīrāb などを選出した。「民主的」な手段で選ばれた後、これらの役職者はハーキムから認証を受けた。その場合、アミールから認証のための manshūre を受け取ることもまれではなかった。ハーキムの認証や政府の命令を受領する際にはいわゆる進物 (tartuq/tartiq) がつきものであり、それは高価な織物で織られた sārūpa (礼装用の衣装) が折り畳まれた bokhchā (直訳すれば包、束)、種々の砂糖菓子や焼菓子など、それに馬具一式を揃えた馬などを含んでいた。選ばれた当人も代わりに sārūpa を受け取るが、その代金は支払わねばならなかった³⁶⁾。このような風俗史に関する情報は、民族誌学者や美術および文学史の専門家にとって滅多にみられぬ興味深い資料となるであろう。

この部門には、高位の役職者たちがアミールやコシュベギに、任命に関する命令を受け取ったこと、あるいは任務の遂行に着手したことを上奏、上申した文書も含まれている³⁷⁾。また、州における会計監査の実施、徴税、上訴の調査、徴税吏の職権乱用などに関するアミールの命令書やコシュベギの指令書もある。若干の文書は、前任者の死亡や解任あるいは新任者の任命に際しての、qorghān (ハーキムの居住する要塞、居館) の財産収容の件を扱っている³⁸⁾。

一件ではあるが、新任のハーキムの着任儀礼に関する文書は紹介しておいてよからう。通例、新任の州長官の着任を控えて qorghān の支度をするために、中央政府からいずれかの役職者が出向くのが慣わしであった。たとえば、アミール Muẓaffar (1860-1885) の代理人 Tura khoja uraq³⁹⁾ は、新任のハーキムの応接のためにバイスの qorghān の準備に赴き、アミールに次のような報告を行っている。曰く、カラテギンを発してユルチ村に着きましたところ、前任のハーキム Amāret panāh⁴⁰⁾ Turdī 'Alī biy の解任を命じた勅命を賜りました。同ハーキムは qorghān を空け渡して家族とともに Allāhjān jibachi⁴¹⁾ の館に移り、土曜日に至高の王城に向けて出発いたしました。と。さらに、前記の代理人は、

要塞の守備隊は1タシュ⁴²⁾の距離まで新任のハーキムを迎えに出る許可を彼に求めたことを報告している。しかし、この件については指示がなかったので、Tura khoja uraq は守備隊を送り出すわけにはいかなかった。けれども、まもなく彼はコシュベギ官房から、件の新任ハーキムは日曜日⁴³⁾にバイスンに着くこと、また守備隊はダシュティガズまで彼を出迎えるべしという補足の緊急指令を受け取った。さらに、この宿営地ではハーキムが宿泊できるように天幕を広げ、1マン(8プード：約130kg)の米を使ってピラフを用意するほか、肉用に羊を購入し、砂糖菓子、メロン、果物、馬匹の飼料などを整えておくべきことが強調されていた。そしてハーキムが qorghān に到着するまでに、1マンの米を使ったピラフとあらゆる甘味を用意し、雌牛一頭と羊2頭を qorghān の門前でほふって、その肉を生そのまま(kham talasha)分配しなければならなかった⁴⁴⁾。

高位の文官、軍人、聖職への任命は、ブハラ・ユダヤ教徒の長老の任命に至るまで広範な問題を含んでいる。任命に関する文書の大部分では、アミールの個人的な決裁が得られていた。コシュベギ官房からアミールの名において出された、Tura khoja şudūr の印のある一文書には、カラ・マンギート部族の Sukhrāb bek tūqsāba, Ismā'īl mīrākūr, Muşīb qaraulbegi らが、'Umar という名の部族長 elbegi(elbek)が職務を果たさず、部族の行政が滞っていることを報じてきたことが書かれている。そのために、カラ・マンギート部族の部衆(jamā'a)は、部族長の職に Khojamberdi を選出した。アミールへの上申書には、新部族長宛に任命書(manshūre)が下されますようにとの請願がみられる⁴⁵⁾。

別の文書では、グザル州ベシユカラの有力者たちの請願が陳述されている。すなわち、Ernazar bay という彼らの aghaliq⁴⁶⁾が勝手に職務を放棄し、今後職務にあたることも望んでいないのだという。そこで、ベシユカラ氏族の部衆は前任者の代わりに Maḥmūd bay を aghaliq に選出した。願書の作成者である Qaḍī Mullā Ḥabībullah は、アミールに Maḥmūd bay を同氏族の aghaliq に任ずる任命書の交付を求めているのである。願書はヒジュラ暦の1311年(1893-1894年)に作成された⁴⁷⁾。

第一部門の文書のほとんどは、地方行政の人事に関わるものである。われわれの知っている叙事的な年代記史料には地方行政の実態に関する具体的な情報が欠けているが、これらの文書からは地方行政の責任者たちが相当の権力を握っていたことがわかる。重要なのは、この地方権力が住民や農業、土地利用、灌漑組織、税の賦課と徴収、地代・租税などと直接に関わっていたという事実である。われわれは文書史料の中ではじめて、amlākdār, amīn, mīrāb, aqsaqal, 'āmil(税の徴収人), pāygīr(税収入を決算する経理係, 正確に言えば国庫の官吏)などの重要な職務を知ることになる。彼らと地方権力のさらに

下級の官吏たちは、灌漑水路の修理や清掃、新水路の開設、播種の際の水の分配などのたびに行われるハシャル(ḥashar)のような灌漑に関わる共同作業を組織した。住民にさまざまな通達や指図を伝えるために、aqsaqal や amīn の配下には pāykār と呼ばれるふれ役がいた。特徴的なのは、ハーンやアミールから出された土地・水利関係の文書の多くが、こうした地方権力の責任者たちに宛てられていたことである。それは当然であろう。地方権力こそが現実の力を持ち、農業生産や農民への租税賦課と徴税などと具体的な関係を持っていたのは、これら地方官吏に他ならなかったからである。なお、地方官とその補佐役たちは決まった額の俸給を支給されていたわけではなく、代わりに彼らの職務がもたらす収入を享受していたことに注目しておこう⁴⁸⁾。

もっとも、地方官による職権濫用や不当な徴税行為は、必ずしも処罰されなかったわけではないことも強調しておかなければならない。たとえば、ブハラのカーディー Mullā Ḥabībullah のアミール宛て上奏文によれば、(サマルカンドの北西にある)大きな村落ヤンギ・クルガンの住民代表は、ブハラのカーディーにこう訴え出たという。Buribay 某という彼らの amīn は、住民に対して不正を働き、職権を濫用している、と。さらに申し立てによれば、彼は無能で粗暴、怠惰な人物であり、amīn の職務にも不熱心であったという。カーディーは結論としてアミールに、ヤンギ・クルガンの住民は Jān Murād なる人物を自分たちの amīn に選び、前任者はこれを解任したことを報告し、新たに選出された amīn に任命書を交付するようお願い出ている。この文書にはカーディー Mullā Ḥabībullah の印が押され、ヒジュラ暦1305年(1887-1888年)の日付がある⁴⁹⁾。また、カーディー Mullā Muḥammad Bek khoja šudūr の作成にかかる別の文書には、カマト郡クムシュケント⁵⁰⁾のカーディー・ハーネにこの地区の住民が集まり、彼らのアクサカル Mīrzā Mukhīt を告訴したとある。嘆願者たちは、とりわけ彼の職権の濫用ぶりと公務(dīvān)ならびに臣民(ra'īyat)の双方に対する放漫な仕事ぶりとを指摘したという。そこで、クムシュケントの住民はこのアクサカルを解任し、代わりにミールザー・ナズルッラーを選んだが、カーディーはこの新任者に任命書を交付するようアミールに願い出ているのである⁵¹⁾。

先に下級の行政官についてふれたとき、大きな村落や都市における地区の長として bābā に言及した。われわれの古文書からうかがえるように、この bābā は手工業者の同業組合をも管理しており、最古参の職人(ahl-i ḥurfa)と思われる。たとえば、ジャウツディン州のライースはアミール宛ての請願書の中でこう記している。同州の手工業者たちが彼のもとに出頭し、Jumabay という彼らの bābā(直訳では、祖父、老人)が死去したと

申告した。彼らはその代わりに 'Abd al-Rasūl という新しい bābā を選出したので、ライスはアミールに新しい任命書の交付を願い出たわけである。この文書には、Mullā Karīm Tilla khoja ra'īs muftī の印とヒジュラ暦1311年(1893-1894年)の日付がある⁵²⁾。

周知のとおり、マールワラーアンナフルには8世紀初頭のアラブの征服以来、アラブ人たちが住み着いていた。アラブ人は現在もブハラ県(カラクリ)とカシュカ・ダリア県とに居住しており、民族誌学および言語学の興味深い研究対象である。ブハラ・ハン国のアラブ系住民は、遊牧民も定住民も、いわゆる mīr-i hazār-i 'arab(アラブ千人長)の管轄下にあった⁵³⁾。

アシュタルハン朝期(17-18世紀)には、中央政府に付属して国内に居住するアラブ関係の業務を処理する専門の部局 dīvān 'arabkhāne があった。この局は、アラブ人の軍隊への編入あるいは除隊、他所への移動ないし移住、納税などに関する事務を取り扱っていた⁵⁴⁾。

Mīr-i hazār-i 'arab の職は、マンギート朝の最期までであった。アミール 'Abd al-Aḥad 宛て書簡の一つには、アミールの命令によりカルシ州の mīr-i hazār-i 'arab であった Tura(原義は王子)Quli Mīrzā の死去の信憑性が調査されたとある。このアラブ集団(jamā'a)は、故人の代わりに 'Abbās biy という名の長老を選んだという。書簡の筆者 Qādī Mullā Qavām al-Dīn khoja šudūr は、新しい mīr-i hazār-i 'arab のために「至高の命令」(manshūre-yi 'ālī)が下されることを求めている⁵⁵⁾。

よく知られているように、ブハラのユダヤ教徒は隔離された共同体として居住していた。首都のブハラでは、ユダヤ教徒のカラントル(kalāntar-i ahl-i yahūdīyān)という職があり、これに選出された人物が共同体を管理していた。カラントルが選出されると、まずブハラの大カーディーの居宅で就任の手続きが整えられる。ついで大カーディーがコシュベギに伺いをたて、コシュベギはまたアミールに新任のカラントル宛に任命のヤルリクが交付されるよう請願するのであった⁵⁶⁾。//ブハラ市のユダヤ教徒は、行政上は大カーディーに従っていたが、税務については徴税官 zakātchi に従い、これに人頭税 jizya⁵⁷⁾を支払っていた。しかし、ブハラのユダヤ教徒は、その卑しめられた状態にもかかわらず、経済的にはかなり高い地位を保持しており、若干のユダヤ商人はロシアのみならず、西ゲルマン諸国とも商取引を行っていた⁵⁸⁾。//

コシュベギ文庫の「行政部門」には、キャラヴァン貿易の組織やキャラヴァン・バシの選任に関する文書も少なくない。ブハラ領内の諸都市に限らず、カザフスタン(カザリンスク、イルギズ、アク・メスジド、カルマクチ、トルガイ)やシベリア、オレンブルグなどの

大都市にもキャラヴァン貿易を行う大商人たちがいた。ブハラ商人の多くは、これらの都市に商会や大きな店舗を持っていた。大商人にはテズ・グザル村の出身者が多かったが、この村はシャープール・カム郡の大村で、おりよくキャラヴァン路の出発点に位置していたからであろう。キャラヴァンや店舗の持ち主の中には、何百万もの資金を回転させる者もいた。キャラヴァン・バシの職に選ばれた者には特別の証書が与えられたが、これを受領するには巨額の現金と高価な進物を贈らねばならなかった⁵⁹⁾。このような証書を得るために、カザフスタンやシベリアの諸都市、オレンブルグ、その他の地のブハラ商人たちは、高価な進物とアミール宛の願書とを携えた代理人をコシュベギの官房に遣わした⁶⁰⁾。

ブハラ市のライースがアミールに上奏した別の文書は、首都のキャラヴァン主たちがそのキャラヴァン・バシ Kamāl bay をライースに訴え出たことを述べている。ライースは告訴を審査し、件のキャラヴァン・バシは実際に職務怠慢であり、商務の改善に貢献していないことを確かめた。そこで、ライースはアミールに、商人たちは著名な商人、キャラヴァン主の Ikhlaṣ bay を選び、彼にアミールのヤルリクが下されることを願っていると上奏したのである⁶¹⁾。

コシュベギ文書の中には、シベリアやカザフスタンの諸都市に商会を構える、もっとも富裕な商人たちのリストがある。各人の資本は、およそ100万ルーブリもしくはそれ以上を数えている。このような商家が46あった⁶²⁾。数百万の資本を抱え、自分のキャラヴァン・バシ(その名は‘Abd al-Rahīm)を有する最大の商人は、前記シャープール・カム郡テズ・グザル村の出身で Fayzullāh bay の息子、‘Abd al-Mu’min bay であった。彼はトルキスタンにおける大十月革命の勝利とソビエト政権の確立にことのほか敵意を抱いた人物である。彼はブハラのアミール ‘Ālimkhān に二通の請願書を書き、そこで「ロシアのボリシェヴィキが神聖なるブハラに対して戦いを始めたという不快きわまりない知らせを受けた」ことについて深い憂慮の念を表している⁶³⁾。‘Abd al-Mu’min bay は、ボリシェヴィキを「迫害者」、「(民衆の)抑圧者」、「強奪者」あるいは「不正なる者たち」と呼び、これにもっとも醜悪な表現を用いてはばからなかった。さらに、二通目の誓願書はちょうどアミール国最後の日にあたっているが、バイはこう述べている。ソビエト政権は莫大な金銭(naqd)と貴金属、925,506ルーブリ相当の織物を彼から没収し、明らかに独立した商会を営んでいた彼の息子も、411,950ルーブリ相当の財産を奪われた、と。

‘Abd al-Mu’min bay は結びのところで、ロシアのボリシェヴィキは彼の息子から1,537,450ルーブリを強奪したと述べ、その最後の日を迎えたブハラ・アミールから財産

取り戻しの支援を仰いでいる⁶⁴⁾。この文書からは他のこともわかる。‘Abd al-Mu’min bay の一族は、テズ・グザル村に広大な灌漑耕地と牛や羊の群れを所有していた。そして、一族の者たちはブハラにおけるソビエト政権の確立の後も、これに対する敵対的な活動をやめようとはしなかった。

宗教やイスラム司法に関わる職務への任命書もかなり多い。ブハラはアミール国の最後に至るまで、宗教教育の中心地というかつての役割を保持しており、中央アジア全土はもとより、ヴォルガ沿岸地方からも学生たちを引きつけていた。周知のとおり、膨大な数のマドラサの学生や教師がワクフ収益で生計を立てていた。かつてワクフの管理人 (mutavallī) は、ワクフの遺言者の意志で任命されたものであったが、この時代にはその任命権は大カーディーににあった。もっとも、以前と同じくこの時代でも、mutavallī の任命は国家の統治者によって認証され、任命のヤルリクが出された⁶⁵⁾。

興味深いのは、ムフティー職への任命の手続きである。これはブハラの聖職階級では、シャイフル・イスラームと大カーディーに次ぐ第三の地位を占め、[その主席は]「学を究めた人」(a‘lam)の学位を持つことができた。この法学者の称号は faqāhat panāh(法学の拠り所)である。ムフティーは、任命に先立って大カーディーの審査を受けた。たとえば、ブハラの大カーディー ‘Abd al-Shukur Ṣadr al-Dīn は、(1885年)ギッサル州のムフティー Qāsim khoja を試験したことをアミール Muẓaffar に上奏している。彼は、法学書をよく読んでおり、これらをアラビア語からペルシア語に自由に翻訳し、また注釈をつけたという。彼はその学識により、十分ムフティーおよびライースの職が勤まるので、大カーディーはアミールに Qāsim khoja を上記の職[ブハラのムフティー職]に認証するよう願い出たのである⁶⁶⁾。これは、ムフティー職が自立したものではなく、同時にマドラサにおける教授やライースの職を兼ねていたことを考えれば、当然のことであろう。なお、A. A. セミョーノフ教授が整理、登録したウズベク共和国科学アカデミー東洋学研究所蔵写本の保存室長、故イバドゥッラ・アディーロフの指摘によれば、何らかの学者あるいは法官の職に就く資格は、クケリタシュ、ガウクシャン、ミーリ・アラブなど一部のマドラサの教授、ムダッリスに限られていたという⁶⁷⁾。

アミール国の首都にあって、シャリーアの遵守に関わる領域で大カーディーに次ぐ重要な職務は、ライース(前述参照)あるいはブハラの通称でいうイーシャーン・ライース(ライース猊下)であり、その称号は ra‘īsat panāh(ライース職の拠り所)であった。

【第2部】 「コシュベギ文庫目録」の第二部には、内政の諸問題に関わる文書類がまとめ

られている⁶⁸⁾。この部の文書は、19世紀後半から20世紀初頭の中央アジア社会政治史について、きわめて貴重な資料を提供する。これらは官吏やハーキム, amlākdār,あるいはmergān(原義は「腕の立つ射手」と呼ばれる通報者などが郡や州での事件について現地から送った報告, また官吏と住民との間のいさかい, 住民による財務官吏や徴税吏(‘āmilān-i kharāj)あるいは他の官吏の職権濫用の告訴などに関する文書を含んでいる。これにはまた, 堪え難く苦しい状況や封建的な専横のために住み慣れた土地から逃亡した農民, 公権力に隠れて「政治的」あるいは他の犯罪を行った者たちの捜索に関する文書もある。//

1868年6月23日付けのロシア・ブハラ条約によって, アミール国における奴隷制度と奴隷貿易は廃止されたにもかかわらず, ブハラに対するロシアの保護が確立した(1873年9月18日付けのシャフリサブズ条約)後ですら, この奴隷解放条項は履行されなかった。1873年9月18日以後の文書を見ると, 奴隷や捕虜が頻繁にロシア領内へ逃亡し, ロシア当局に奴隷の解放を促進するよう訴えていることがわかる。文書には, 奴隷主の非人道的な残酷さや奴隷とその子供たちの過酷な境遇, 男女の奴隷の悲惨な運命などが記されている。ブハラ・アミールが1873年条約の履行を約束した後も, ブハラでは奴隷の所有が続けられ, 公権力は報告書で言い逃れをするばかりであった。奴隷制度はトルクメン諸部族の間にもかなり残っていた。ケルキ州のカーディーがアミールに上奏した文書によると, 彼は男女の奴隷の解放に関するコシュベギからの文書による指令を受けたという。これに基づいて, 奴隷のカリームクル, ダウラトケルデイ, マヒーターブ, ソフバトバイ, クマク, パフラワン, マルジャンらが解放された。これらの奴隷は, ‘Abdullāh Īshānなる某サイドの所有物であった。すべての解放奴隷にカーディーの執務室(qāḍī khāne)で相応の文書が発行された。文書の日付はヒジュラ暦1303年(1885-1886年)である⁶⁹⁾。

1873年条約の奴隷解放条項が人道的な役割を果たしたことは疑いない。奴隷のくびきに苦しんでいた多くの人々が解放されたからである。しかし, ブハラ・アミール国はもちろん, ヒヴァ・ハン国においても, 多くの不運な人々がなお奴隷の身分に置かれていた。彼らの解放をもたらしたのは, 1920年の人民革命である。

1898年のアンディジャン蜂起に関する文書も興味深い。これはミング・テベの生まれで, “Dukchi”[紡錘作り]と通称された反動的なイシャー、マダリー(Muhammad ‘Alī)が指導した蜂起である。蜂起が鎮圧されると, その参加者の多くがブハラ領内に逃げ込み, 地方の諸州に隠れたり, 一部はブハラ領を経てアフガニスタンへ逃亡した。ロシアおよびブハラ当局は, 逃亡者の捜索に奔走させられた。多数の文書に逃亡者の外見が

詳細に記されている。ある文書には次のようにある。「Ishān khān Tura の息子 Darvīsh khān は、アンディジャン市の出身にして蜂起の参加者なり。1899年2月ジザクの監獄を脱走、カラテギンに逃亡せり。これに同行するは、カーブルより来着せしアンディジャン人、Muḥammad Karīm および Umarqul の息子 Narimbay。。逃亡者 Darvīsh khān の人相：45歳、長身、毛は褐色、長い顎髭のあばた顔、目は緑がかった灰色、顔は黄褐色で前歯を二本欠き、大足」⁷⁰⁾// 新ブハラ(今日のカガン)に置かれたロシア政治代表部は、ブハラ政府に Darvīsh khān の引き渡しを要求した。ロシア当局の要求によれば、彼には東部ブハラで反乱を組織する企図があったという⁷¹⁾。//しかし、捜索は成功せず、彼はアフガニスタンへ逃げ去った。//

ブハラ政府自体、アンディジャン蜂起にはかなりの関心を示していた。アミール政府は、アンディジャンに数名の秘密諜報員(mergān)を派遣し、状況の観察と蜂起の詳細の報告とにあたらせた。コシュベギとブハラ市の大カーディーとに宛てられたある秘密報告書によれば、ヒジュラ暦1316年ムハッラム月10日(1898年6月2日)月曜日、蜂起の後にマダリー・イシャーン(蜂起の指導者)は身を潜めたが、ロシア当局は“Dukchi”イシャーンおよび他の反乱指導者たちと関係を持っていた二人のイシャーンを逮捕した。別の諜報員の報じるところによれば、ヒジュラ暦1316年サファル月7日(1898年6月27日)日曜日、コーカンド・キシュラクのミング・バシによる度重なる捜索の末にイシャーン・マダリーとその甥、さらに5、6名の反乱参加者がウズゲントのダッラで逮捕され、ロシア当局の手に引き渡されたという。この文書には、「イシャーンは現在監獄にあり、アンディジャンの残りの住民は平穏で、住民の生活は平常に復した」とある⁷²⁾。

第二部の文書類の中には、トルキスタンとステップ軍管区(カザフスタンの)「異族」住民に対する前線後方への動員令(ツァーリの勅令)に関する興味深い資料がある。19歳から43歳の男子住民の動員令は、1916年6月26日に公布された。コシュベギ文庫には、1335/1916年の[動員令に反対する]ジザク蜂起の参加者捜索について、コシュベギの官房とロシア政治代表部との間に交わされた往復文書がある。ブハラ側官吏は、ロシア領内、とりわけサマルカンド地方のムスリム臣民が今や(1916年)ブハラ領内に移り住んでいることをコシュベギに報じている。移民たちの社会構成は一樣ではなかったが、その大部分はジザクにおける蜂起(ghālāyan)の協力者であった。文書には捜索中の人物のリストが添付されている⁷³⁾。別の文書では、ジザク蜂起に荷担したロシア国籍のムスリムの越境が頻繁になっていることが報じられている。逃亡者は、とくにヌルアタ山脈を越えてやってきたという。コシュベギは、文武の官吏に各要衝で監視を強化し、ロシア国籍の者

はすべてロシア当局に引き渡すよう命令した。これには、グジウム・サライ、クシュラーバード、アフチャーブなどからの逃亡者のリストが添付されている⁷⁴⁾。

しかし個々の文書の内容を見ると、ブハラの地方当局は逃亡者をかくまい、彼らをロシア側に引き渡すことを望まなかったようである。シャフリサブズのハーキムはコシュベギ宛ての書簡で、シャフリサブズに「宰相閣下」(すなわちコシュベギ)の特別全権代理、Ahrārquľ bek biy dādkhōh が到着したが、彼はわれわれにシャフリサブズとカルシ州にはあたかもトルキスタンやサマルカンドから逃げてきたロシア国籍者(fuqarā')が住みついているかのように述べた、と記している。「閣下のお耳に入りましたかかかする噂は根も葉もありません。シャフリサブズの住民は、職人も商人も、また農民(ra'iyat)もその生業に励み、(アミール)陛下のために祈っております。繰り返して申し上げますが、後方労働(mardikārlik)への動員令の故に住地を離れたトルキスタンやサマルカンドの臣民が、シャフリサブズ、キターブ、カルシなどに避難の先を見い出したとの噂は偽りでありませぬ」と⁷⁵⁾。一方、コシュベギの全権代理としてシャフリサブズに赴いた前記の Ahrārquľ bek biy dādkhōh は、コシュベギ宛の上申書で次のように報告している。「現在キターブとシャフリサブズの領域内にはロシア領内から逃げて来たかなり多くの人々が住み着いております。彼らの言うには、逃亡の理由は肉體労働への動員令であったそうでありませぬ。彼らは(アミール)陛下の御健勝を祈り、旧地に戻ることは毛頭望んでおりませぬ。愚臣は彼らの名簿を作成いたしました」と。Ahrārquľ bek biy dādkhōh は最後に、逃亡者たちは避難してきたところにそのまま留めおくべきことを具申している。この文書には Ahrārquľ bek biy の印と1336年/1916年の日付がある⁷⁶⁾。//

トルキスタン軍総督 A. N. クロパトキンは、逃亡者たちを送還するようアミール本人に直接要請した。アミールからコシュベギに下された一文書では、トルキスタンとサマルカンドから逃亡したロシア臣民がブハラ東部諸州、とりわけカラテギンとギッサルに來住していることが述べられている。これは、逃亡者を搜索し、彼らをサマルカンドのロシア当局に引き渡すべしとの命令を含んでおり、逃亡者の搜索と送還にあたっては貧者も富者も等しく扱うべきことを特記している⁷⁷⁾。しかし、われわれの文書からは、ブハラ当局が1916年反乱の参加者を含む逃亡者たちをロシア当局に引き渡したどうかはわからない。//

現地住民を後方労働に動員するというツァーリの性急な命令は、勤勞住民の利益に反するものであった。この時期に人民大衆の階級的な自覚は相当に高まっていた。したがって、ツァーリの命令は強力な抵抗に直面した。総督クロパトキン自身、動員令布告の

当初から現地住民は「この命令にかなりいらだっていた」ことを認めていたほどである。そして、労働者徴用令が布告された直後、騒乱が始まり、それは州から州へと転移していったのである。この動員に関してとりわけ悲観的であったのが、サマルカンド軍総督 N. ルイコシンであった。彼はクロパトキン宛の電報で、「原住民の自発的服従は到底望むべくもあらず」と打電している⁷⁸⁾。また別のところで彼は、現地住民の間では「民心の動揺が高まり、喧嘩や殺傷がここかしこに突発して、地方当局の訓戒も効果がなかった。やがてこれらすべてがロシア政府に対する公然たる反乱の形をとって現れるまで、彼らはどんな説明も信用しなかった」と書いている⁷⁹⁾。

ツァーリの勅令に反対する民衆蜂起は、1916年7月4日ホジェント住民の異議申し立てに端を発し、またたくうちに全サマルカンド、シルダリア、フェルガナ州に波及したばかりか、中央アジアとカザフ草原の全域をおおった。7月11日にサマルカンドの旧市街で暴動が起ると、その2日後の7月13日に有名なジザクの反乱が始まったのである。トルキスタンのツァーリ権力はきわめて困難な状況に陥った。1916年7月17日付けの勅命により、トルキスタン軍管区には戒厳令がしかれ、数日後にはクロパトキンに戒厳司令官として全権が与えられた。武器なき民衆の反乱は、前代未聞の残忍な殺りくの末に鎮圧された。しかし、民衆は閉塞状態からの脱出を求めて故郷を離れ、カラテギン、ギッサル、ダルワーズなどのプハラ領に移り住み始めた。彼らはペンジケントの山地を通過して越境した。後にクロパトキンはこう書いている。「全ペンジケント道は(1916年)7月中旬の10日間というもの、逃亡者であふれ返っていた」と。「原住民の自発的な服従など期待すべくもなかった」のはもちろんのことである⁸⁰⁾。

1916年反乱はツァーリのトルキスタン総督のみならず、土着のバイ[資産家、地主などの総称]や聖職者にも向けられた反乱であった。これらの要素は、反乱の過程で否定的かつ背信的な役割を果たし、反乱の勢いに恐れおののいていた。土着のバイやムスリム聖職者は、ツァーリ権力の残虐な鎮圧手段を支持した。このような光景は、ソビエト・ウズベク文学および文化の基礎を据えたハムザ・ハキームザーデ・ニヤージー [1889-1929]の一連の作品、すなわち1916-1919年の間に書かれた『こうしんばら (*Säfsär gul*)』、『バイと作男』、『毒された生活』(1916年)、『動員された者たちの悲劇』などに巧みに活写されている。きわめて政治的なテーマにそって書かれたこれらの作品は、バイや聖職者、ブルジョワ民族主義者、すなわちジャディード[改革派知識人]の背信行為を暴露するものであった⁸¹⁾。

【第3部】 第3部には対外関係に関する文書が収められており、これらはアミール国の外交、政治および商業関係を反映している⁸²⁾。この文書類は、ブハラとイラン、アフガニスタン、インド、ロシアおよびトルキスタン総督府との相互関係を物語っている。若干の文書は、ロシアの影響力に対するイギリスのアフガニスタンにおける破壊活動、またイギリス人がトルキスタンおよび当のブハラで続けていた同種の活動を明らかにしている。第一次世界大戦の開戦前と大戦期には、ドイツ情報部員もブハラとトルキスタンにおいて同様の破壊工作を行った。

周知のとおり、ブハラ・アミール国はロシアの保護下においてはじめてその主権を保持しており、ロシア政府の許可なくして外国と交渉する権利を持っていなかった。ロシアの保護統治は、(他の多くの要因とは別に)ブハラにとって死活の二つの問題によってことさら強固なものになっていた。まず第一に、ロシアはしばしばブハラに不可欠の灌漑用水をてこに対ブハラ関係を調整した。つまり、ザラフシャン川の分水界はロシア領のサマルカンド州にあり、したがってブハラ諸州への灌漑水の供給は植民地権力の手の中にあったからである。これはブハラを経済的に完全にロシアに従属させることになった。ロシアがザラフシャン川上流で開墾を行い、綿花畑や米畑の拡大を進めるにつれて、ブハラへの用水供給は激減し、農業経営にゆきづまった農民は住み慣れた土地を離れ、ブハラ領内から立ち去らねばならなかった⁸³⁾。//

第二に、ロシアは有力なウズベク部族ケネゲスの本拠地、シャフリサブズをブハラ〔アミール〕に「進呈」することにより、その立場を強化することができた。マンギート朝の君主はほぼ120年の間、ケネゲス部の反抗を抑えて、これを自らの権力に従わせることができなかった。そこで、1869年秋アミール Muzaffar はケネゲス部を服属させるにあたってロシアに支援を求め、1870年ザラフシャン管区司令官はシャフリサブズに遠征した。そして、平定されたシャフリサブズは、ここに配下のベクを任命するようにとの提案とともにアミールに譲渡されたのであった。この譲渡にはいかなる条件も付けられてはいなかった。有名な『中央アジア征服史』全3巻の著者テレンチエフは、この譲渡は「あらゆるブハラ人にロシアへの好意を抱かせ、このときからブハラに関する限りわれわれの立場は確実だと見なせるようになった」と述べている⁸⁴⁾。しかし、この征服もケネゲス部の反抗をくじいたわけではなかった。シャフリサブズの有力者たちは、征服は住民の意志に反して行われ、彼らはアミールの支配下にとどまることを望んではいないと断言していた。聖職者の代表をも含む一団の人々は、シルダリア州総督 N. N. ゴロバチョフに、ロシア政府がシャフリサブズの住民をロシアの臣民として受け入れるようお願い出ている⁸⁵⁾。

シャフリサブズ人のこのような意向は、1870年代に中央アジアを旅したアメリカ人 E. スカイラーも注目している。彼によれば、シャフリサブズの併合は、「現地住民の意向と抗議に反して」行われ、「彼らは Muzaffar al-Dīn の統治よりはロシアの統治の方がはるかに好ましいと考えていた」のである⁸⁶⁾。

ヒジュラ暦1290年シャアバーン月/1873年(9月24-10月22日)、シャフリサブズで締結された条約は、ロシア・ブハラ関係において重要な役割を果たした⁸⁷⁾。条約では、ブハラ・アミール国はロシア政府の裁可を得てはじめて諸外国と交渉しえることがいまだ一度強調されていた。アミール国は、ロシアの意向と禁止にもかかわらず、近隣諸国との交渉を続けたが、アフガニスタンでアミール 'Abd al-Raḥmānkhān (1880-1901) が(ロシアの効果的な支援を得て)権力の座に就き、ロシアとアフガニスタンとの間に良好な関係が成立してからは、ブハラはせいぜいロシアとアフガニスタンとの間の仲介役を果たすにとどまった。個々の文書ではアミール 'Abd al-Raḥmān は国王と呼ばれている⁸⁸⁾。なお、ロシアはアフガニスタンとの外交交渉をトルキスタン総督府を通して行い、一方のアフガニスタンは北部アフガニスタンの総督を通してこれを行ったことを指摘しておかねばならない⁸⁹⁾。

文書の中には、イランの上層部内の人物に宛てたコシュベギの書簡もある(これらの書簡はウズベク語およびペルシア語で書かれている)。コシュベギはイランの王子 Ridā Qulī Mīrzā に、彼の手紙を受取り、その内容をアミールに報告したと記している。アミール Muzaffar は、返事は「信頼の置ける王子, Shaykhān なる人物を介して」口頭で行うと答えている⁹⁰⁾。

ブハラと日本政府との接触に関する文書も見つかった。1297/1880年コシュベギはブハラで日本の領事 Neyse(あるいは Neysi, 名前の翻字の正しさは定かではない)[西徳二郎]をあたたかく応接し、高価な馬具と栄誉の長衣、金銭からなる贈り物を与えた⁹¹⁾。

第三部の文書中には、ブハラ領を訪れたヨーロッパ人(farangī)に関するものが多数ある。1316/1898年ブハラの官吏は、数名のヨーロッパ人がシュグナンに到着した件について東部ブハラからコシュベギ宛に上申している。彼らはバダフシャンのイシュカミシュを訪れ、これからハロークを経てパミールに行こうとしていた⁹²⁾。

イギリス人もブハラ領を訪れていた。1333/1915年コシュベギはギッサルとカラテギンのハーキムに、近々東トルキスタン(新疆)からギッサル州に到着するはずのイギリス人 Avraily Isnief(正しい人名表記の復元は困難である)の応接と便宜供与に関する指示を送っている。通信文の書き手は、自分はすでに上記のイギリス人がシュグナンに到着

したことを知っている」と述べている。手紙には、シュグナンのハーキムに客人がシュグナン方面に現れた際には援助を与え、カラテギンに着くまでもてなしを怠らぬことについてしかるべき指示が出された、と記されている。問題のイギリス人は1915年の10月初頭、3人の部下と12頭の駄獣を連れてギッサルに到着した。自身の希望により、彼にはすばらしい果樹園があてがわれ、必要なあらゆる飲食物と飼料が与えられた。彼の前途や宿泊(qonush)設備についても配慮がなされ、道中の安全をはかるために警護兵 navkar と召使い shāgird pīshe が付けられた。彼はついに目的地であるセリアシヤ(現在はスルハンダリア県の中心)に到達したが、ここでブハラ政府の高官と面会することになっていた。文書のコシュベギ名の印には、Khoja Quli bek biy divān begi/qoshbegi/ とある⁹³⁾。これより先、ブハラ政府はイギリス人に棉花およびその他の高価な商品を国外に送り出すよう促していた⁹⁴⁾。ブハラとイギリスとの交渉は、インドと東トルキスタンのカシュガルを通して続いていた⁹⁵⁾。

ロシアの度重なる警告にもかかわらず、ブハラはロシア政府に隠れて諸外国との非合法な関係が続けていたのである。

【第4部】 第四部には、アミール国の経済(農業、灌漑、手工業、商業、牧畜、その他)に関するあらゆる資料が集められている。文書の中には、キシュラク[村落]や州、アムラクダール管区の綿密なリストがあり、これには各々の耕地面積および住民、早まき(kabūd bari)と遅まき(safid bari)[の農作物]、手工業そして家畜からの徴税額についての記載がある。また荒蕪地に関する文書もあり、その土地はこれを灌漑によって開墾した者に長期にわたって貸し出された(ijāra)という。その期間は99年と記されている⁹⁶⁾。

若干の文書は、灌漑の実情、灌漑水路浚渫のための労役 hashar への住民動員の実態を明らかにしている⁹⁷⁾。中でも興味深い史料は、人民大衆の反封建的な意気、彼らの困窮した状況、過重な税負担に耐えかねた農民の逃亡に関するものである。彼らの多くはロシア領のトルキスタン地方(トルキスタン、カザリンスク、キジル・オルダ、タシュケント)あるいはアムダリアを越えてアフガニスタン領内へ逃散した。ブハラ政府の租税政策は過酷かつ無秩序であり、シャリーアを含めていかなる法律にも制約されていなかった。シャリーアに規定された租税、すなわち土地税(ハラージュ、ウシュル：現物と貨幣)、ザカート(家畜、商業、その他の財産税)、人頭税(ユダヤ教徒やヒンドゥー教徒などアミール国の非ムスリム臣民に対する税、いわゆるジズヤ)、そして商貨物関税(bāj)などの他に、ブハラにはシャリーアに規定されていない実に多くの税があった。ブハラの有名な学者

で社会活動家, Aḥmad Makhdūm-i Dānish(1827-1897)の表現を借りれば, 税は「ライーヤト(臣民)から強制と脅迫を用いて」徴収され⁹⁸⁾, 支配的な上層領主階級の寄生的な必要を満たすために費やされていたのである。

法外な徴税による農民の困窮ぶりは, アミールの官吏ですら看過するわけにはいかなかった。たとえば, ヴァガンジー郡のカーディーはコシュベギ宛の上申書の中でこう述べている。彼は滞納金(bāqīmānde), 建築税(uskune puli), 駄獣税(musht-i bār), 灌漑用水税(jūy puli)その他の徴収について命令を受けたが, ヴァガンジーのライーヤトは貧窮の極にあり, 借金を重ねて零落している, と。「私が農民の惨状を無視して, 彼らからなお金銭を要求すれば, 彼らの不満と暴動を招きかねません。そのとき私はよくてもカーディーの職務を放棄せざるをえなくなりましょう。これらの報告を今日まで閣下とアミール陛下に申し上げませんでしたのは, ひとえに陛下のお怒りにさわることを恐れたからであります。」上申の末尾でカーディーは, その代金で住民の滞納金を支弁するために自分の果樹園を売りに出したことを述べている。彼の言葉によれば, 彼はこの売却の件をアミール宮廷のカラウル・ベギ(警備隊長)に委任したという⁹⁹⁾。また, ギッサルのライース・ムフティーは, アミール Muẓaffar への上奏文で, この州にアミール国の財務長官(dīvān begi)が到着したことを述べている。上奏によれば, ディーヴァーン・ベギの到着まで, 財務官は灌漑耕地 1 コシュ¹⁰⁰⁾から12タンガ, またボガラ地[人工灌漑に頼らない播種地] 1 コシュからは 1 タンガと 4 マン(1 マンは約130kg)の穀物を不法に取り立てていたという。「このようなシャリーア外の過重な徴税のために, ライーヤトは農業に従うことをやめてしまいましたが, このディーヴァーン・ベギは触れ役を通して, これより農業に従事する者には, ハラージュとコシュ・プリを 2 年間免除することを布告いたしました。」さらに, 今やギッサルにはこの布告の後さまざまの村から農民が集まり始め, たとえばデヒ・ナウ(デナウ)からは200家族およびラカイ部族の数家族がやってきたという。ギッサルのライース・ムフティーは, 農民がここで打ち捨てられた土地を再び耕し始めることを期待している¹⁰¹⁾。

不正な徴税のために零落したのは定住農耕民や都市の職人だけではなかった。それは牧畜にあたる遊牧民や半遊牧民の場合も同様であった。ある文書にはこうある。Khu-dāy Nazarbay atalıq がザカートチの職に任命されたときのこと, 彼は「最初の年は家畜の総数に合わせてザカートを公正に徴収しましたが, 翌年は厳しい冬で家畜が斃死したことにも構わず, (ザカートを)不正に取り立てたのであります」と。「このような振る舞いは, 牧畜民の貧窮をもたらし, 彼らは旧来の遊牧地を捨てて, 四散し始めました。」訴え

の末尾には、「このような事態が続くなら、畜産に従う者は一人も残らなくなり、住民 (fuqarā') の間には不満が強まることでありましょう。これが不測の事態を招くことを憂慮する次第であります」とある¹⁰²⁾。

【第5部】 軍事に関する資料は、われわれのコシュベギ文庫目録第5部にまとめられている。すでに述べたとおり、マンギート朝の君主たちは不正規の封建的な予備軍に代えて常備軍を創設し、軍事封建貴族層をかなりの程度弱体化させた。一方、ロシア政府はアミール 'Abd al-Aḥad にはじめ公爵、ついで大公の称号を授け、彼をテル・コサック軍団に編入したので、アミールはこのコサック軍団の軍服を着用し、ブハラ軍の一部もこれを支給された。しかし、軍隊にはかつての位階が残っており、大隊長は sar karde (原義は部隊長)、小・中隊の指揮官は従来どおり、un bashi (十人長)、yuz bashi (百人長)、pānsad bashi (五百人長) などの階級を保持していた。アミール Dāniyāl の治世にブハラ軍に勤務したロシア人捕虜の下級士官フィリップ・エフレーモフは、アタリクは「私の熱心な仕事ぶりを見て、私にロシア軍でいえば大尉にあたる yuz bashi の官等を下賜された」と書いている¹⁰³⁾。高位の軍人には次のような位階があった。Mubārazat panāh (戦いの拠り所)、Mīr-i ākhūr (司馬頭)、tūqsāba (自分の軍旗 tūgh あるいは tūq を有する部隊長)、qaraul begi (警備隊長)、eshik agha bashi (大門守護頭)¹⁰⁴⁾。一般の兵卒は navkar や sarbāz と呼ばれた。アミール Muẓaffar と 'Abd al-Aḥad の親衛隊には、おびただしい奴隷がいた。彼らの名前は12葉の大型文書に列挙されている¹⁰⁵⁾。筆者は(公文書史料に基づいた)初期の研究で、ブハラ軍は現物で給与を与えられていたことを指摘した。軍人には特定の耕地からの tankhōh (税収入) あるいは収入の額が指定された ulūfa (alafa) (原義は糧食、飼料) が下賜されていたのである¹⁰⁶⁾。しかし、末期になると軍人たちはすでに月毎の俸給 (māhāne)、ときには日当 (yavmīya) を受領していた。コシュベギの財務部宛報告書には、Ahrārquī bek の指揮下で勤務するシャフリサブズ守備隊 (daste) の月給が定められた、とある。これによれば、sarkarde が500テンゲ、yuz bashi 250テンゲ、sarbāz で25テンゲであった。キターブ守備隊の月給は、総額で4,170テンゲと決められた¹⁰⁷⁾。なお、すでにアミール Muẓaffar のときから、アミール親衛隊の sarbāz を構成していた奴隷兵は他の兵士と平等の給与を受けていた。

1285/1868年、コシュベギの命令により、5,065名のブハラ守備隊に101,960テンゲの給与が支払われた¹⁰⁸⁾。

第5部の文書は、ブハラ軍の発展を研究する上で興味深い史料となろう。

【第6部】 ここには司法関係の文書が集められている。古くからムスリム諸国でそうであったように、ブハラにおいても司法の頂点をおさえたのは聖職者であった。任意の宗教法規範、法学(fiqh)[の体系]は、シャリーアの規範を法源として法学者が作り上げたから、聖職者が民衆に大きな影響力をふるったのはもちろんのことであり、彼らはいかなる自由思想をも許容しなかった。

末期のアミールたちの時代には、シャイフル・イスラームはたんなる尊称、むしろ文語的な表現となっていたので、司法の管理は大カーディーに任されていた。この職に就けるのは首都の首席カーディーのみであり、彼は事実上アミール国の最高裁判官でもあった。これはアミールが任命した。そして、この shari'at panāh(シャリーアの拠り所)の称号を持つ裁判官は、しばしば郡や州のカーディーを審査した。

第6部には、民事訴訟や刑事事件の審査、婚姻、相続財産や売買契約などの諸問題に関わる文書がある。ブハラの訴訟手続きの慣例および法学総体を見るうえで大いに興味深いのは、hīla-yi sharī(原義は法の狡智)というイスラム法の抜け道を使って行われた法決定と、シャリーアで認められた条件での「売買」とである¹⁰⁹⁾。たとえば、周知のようにシャリーアは高利貸し(sūdkhur)を禁止している。しかし、ブハラやその他のムスリム都市では、自分の土地をインド人商人に商業用地として貸し与えたことにして、利潤の一部を受け取っていた。そして、土地の賃貸し料から利子を得ていることを隠すために、カーディーの事務所で、「シャリーアの認める条件で売却」した旨の登記書を作成するのであった。たとえば、1888年 Gul Muḥammad bay の息子 Hikmatqul 某は、ヒンドゥー教徒ハイト・スーフイーの息子ヌクル・スーフイーに1タナブの自分の土地をそこにある建造物のすべてと共に年50テンゲの賃料(ijāra)で引き渡した。しかし、カーディーの事務所 Hikmatqul は、自分は反対に問題の土地を賃借しており、ヒンドゥー教徒ヌクルに毎月2テンゲ32 fulusu[銅貨]づつで賃貸料を(架空に)払い終えるつもりである、と申し立てている¹¹⁰⁾。//

大カーディーと州のカーディーは、国家から俸給を受けず、さまざまな裁判業務や売買手続き、婚姻[証明]、あるいはさまざまな請求権の調停を引き受けたときに得られた収入で生計を立てていた。カーディーがこうした業務で得た礼金は、khidmatāne(奉仕料)と呼ばれた¹¹¹⁾。

【第7部】 第7部には厚生関係の文書がまとめられている。まず、19世紀-20世紀初頭のブハラに、われわれの理解する保健衛生システムはなかったことを指摘しておこう。そ

れ以前と同じく、この時代にはいかなる医療機関もなかった。中央アジアの他の地域でもそうであったように、ブハラには天然痘、マラリア、コレラ、リシュタなどの伝染病が蔓延していた。中でもとくにブハラの住民の間に広まっていたのが難病のリシュタ(飲料水から体内に入った線状虫が皮膚の下で成長して引き起こす病)であった。知られているように、ブハラの町は大きな貯水池(haud)から水を得ており、そこから水運び人(mashkāb)が各戸に届けて回っていたが、そこでは家畜にも飲ませれば、洗面もした(洗浄を行った)。文書の中には、コレラの発生、これに伴ういくつかの州境の閉鎖、コレラに感染した人々の死亡などに関する不安に満ちた情報が見える。

また、首都の衛生状態や下水溝の清掃実施などに関する官吏の報告書もある。アミール国に医療職員と呼べる者がいたとすれば、それは tabīb(治療師)、まじない師、産婆(doya)であるが、そのほとんどは無学な人々であった。

コシュベギ文庫には、アミール国のさまざまな地方での疫病の発生に関するハーキム、カーディー、その他の官吏の緊迫した報告書や上申書が含まれている。たとえば、ケルミーネのカーディー Mullā Mīr 'Ālim は、アミール 'Abd al-Aḥad に(1888年)、町と州の住民の間にマラリアが流行し始めたことを上奏している。カーディーの言葉によれば、疫病が猖獗を極めたのは、チュリ・トルキスタン、ウチ・トゥット、ハラカンおよびヤンギ・クルガン村であった。カーディーは、疫病根絶のための緊急の支援をアミールに求めている¹¹²⁾。

防疫やさまざまな予防措置の実施において、トルキスタンのロシア行政機関はブハラ当局に本格的な援助を与えた。疫病の発生地には医師と中級医療職員からなる医療団が派遣された。たとえば、カガン(新ブハラ)在のロシア政治代表部付のアミール代理部は、ザカスピ州[現在のトルクメニスタン]にコレラが発生したことをアミールに通報している。これについてロシア当局は、コレラの防疫対策をとるためにロシア人医師と助手をブハラに送ることを決定した。ただし、ブハラ政府は彼らの滞在中の給与として3,057ルーブリを支払うよう求められている。政府はこれに同意した¹¹³⁾。また、1898年カラテギンのハーキム Mīrzā bek は、ここへコレラ調査のために mīrzā bashi を伴ったロシア人医師グリゴリエフとやはりロシア人の女医が到着したことを報告している¹¹⁴⁾。ブハラ市にはロシア人医師の協力で病院も設立された¹¹⁵⁾。しかし、文書にある備目録から見ると、病院はみすばらしく、老朽化した家屋に設置されたようである¹¹⁶⁾。//

文書はロシア当局が伝染病の発生にどれほど注意を払っていたかを明瞭に物語っている。たとえば、政治代表部がコシュベギ Jān Mīrzā biy 宛に送った次のような書簡があ

る。「サライ村に伝染病、天然痘が発生した。その拡大を防ぐには以下の対策を講じる必要がある。1)現地当局は発病者があれば直ちにサライ村滞在中のロシア人医師にこれを通報する；2)伝染を避けるために病人は健康者から隔離する；3)水路で洗面したり、下着や衣服を洗濯しないようにする；4)患者が治癒もしくは死亡した時には、下着と衣服を焼却する；5)天然痘に感染した家では消毒を行う。以上のための薬剤はロシア政府が提供する。1898年11月9日、新ブハラ」¹¹⁷⁾ブハラの住民は1920年の人民革命の後、はじめて本当の医療サービスを受けられるようになった。そして、ソビエト政権の時代に伝染性風土病の温床はすべて根絶されるに至ったのである。

【第8部】 ここには、ブハラの風俗史、民衆の世俗的および宗教的な慣習、そして文化や文学に関する文書が収められている。この部の文書はおしなべて興味が尽きないが、その中にはこれまでほとんど知られていない詩人 *Mīrzā 'Abd al-Fakhm*, *Subhī Muḥammad Riḍā*, *Sādiq Munshī*, *Mullā Kāmil* などの伝記資料や詩作品、また19世紀後半のブハラに生きた音楽家、歌手、その他の文化の担い手たちに関する情報がある。コシュベギのさまざまな部局で働いていた *munshī*(秘書)や *mīrzā*(書記)の中には、文学、音楽を愛好し、詩人、音楽家などの情報を好んで収集する人々がいたことを指摘しておかなければならない。コシュベギ文庫成立のはるか以前に活動した *'Alīshīr Navā'ī*(15世紀)や *Sādiq Munshī*(19世紀前半)らの伝記に関する資料とはいえ、これらもまた先の事実を証明するものであろう。たとえば、年代記からの抜粋を基にして作成された *'Alīshīr Navā'ī* の伝記は、詩人の祖先[とティムールの一族と]の親交は、ティムール朝のごく初期にまで遡る、と述べている。彼の祖先はまず、乳兄弟の意味をもつ *kukelidash* あるいは *kukelitash* の称号から官途を始めた¹¹⁸⁾。詩人伝のこの部分はすでにバルトリドが着目したところである¹¹⁹⁾。 *Navā'ī* の小詩と *ta'rikh*(死去の年月日[クロノグラム])もある¹²⁰⁾。

この部には、すぐれた詩人 *Mīrzā Sādiq Munshī Jāndārī*(彼はジャンダール村の出身であった)の伝記に関する資料がある。彼は、アミール *Ḥaydar*(1800-1826)の治世に *munshī* の職にあった。例としては彼が郷里の人々の声を代弁してアミールに嘆願した一句で十分であろう。それはジャンダール(アラブ・バルシア語(sic.)で「生命ある人」)村の畑地に水が供給されることを願った一行で、「おお期待の抛り所よ！すべて(アラビア語 *kull*)は水にて生けるものなれど、ジャンダールにはなおのこと」とある¹²¹⁾。

才気に富んだ風刺詩人で、諧謔的な短詩の作者、筆名 *Muḍtarib*(悩める者)で知られる

Mullā ‘Abd al-Majīd(1842-1896)に関する興味深い資料もある。この筆名は辛苦を強いられた詩人の生活をそのままに反映している。ブハラの大カーディーは、彼をブハラ城内のモスクに付属する salavatkhāne(預言者ムハンマドとその一族を祝福する、よく知られた祈禱文の読み手)の職に就けるようにとの請願の手紙をアミール ‘Abd al-Aḥad に書いた。彼はこの職務から年に25ティツラの俸給を得た¹²²⁾。Şadr al-Dīn ‘Aynī [(1878-1954)ブハラ出身のウラマーで、ソビエト・タジク文学の創始者とされる]は, Muḍṭarib を進歩的な傾向の詩人と呼んでいる¹²³⁾。

進歩的な詩人で社会活動家の Mīrzā Ibrāhīm Subhī(20年代の末もしくは30年代の初めに死去)に関わる文書も、以上に劣らず興味深いものである¹²⁴⁾。また、大いに注目すべきは, Aḥmad Makhdūm-i Dānīsh の自筆書簡であろう。アミールの宮廷に近かったにもかかわらず、その書簡は彼が体験した恐怖、彼の家族を襲った悲運を物語っている¹²⁵⁾。//

民謡や慣習は、民俗学や民族誌学の観点から見て、大きな学問的な価値を持っている。たとえば、花嫁を花婿の家に見送る時に女性たちの歌う歌詞の中に、次のような一節がある。「花嫁と花婿の心からの願いがかない、二人が豊かで健やかに暮らせますよう。たとえ貧しくとも、とげとげしくはならぬよう。。。花嫁、花婿のご両親、ご親族に祝詞を、花嫁、花婿の先生、師匠に挨拶を申し上げます」と¹²⁶⁾。しかし、伝統や慣習の中には腹立たしさを誘うものもある。これは何よりも女性に対する非人間的な扱いである。ブハラではしばしば11-13歳の少女を嫁に出した(より正しくはカーリム[花嫁買い取り金]で売り渡した)。嫁入り後の少女の死亡を証明する資料は少なくない。バリジュアーン(フッタリヤーン)のカーディー Mullā ‘Abd al-Rashīd は、22歳の Qulbān ‘Alī 某が13歳の娘と結婚したが、少女は二日目に死亡したこと、彼女は肉体的に結婚はまだ無理であったことをアミール Muzaffar に報告している¹²⁷⁾。

ブハラの風俗史をみると、人民大衆にとって負担の重い慣習のあったことがわかる。これは要するに、収穫や租税の徴収が終わった後、アミールに高価な進物を送る慣習であった。進物は、高価な金糸縫いの衣装、絹や毛織り、ラシャの織物とその製品、さらにまた金銀、宝石で飾られた高価な馬具付きの純血馬などからなっていた。Tartuq あるいは toqsan tartuq(これは、収穫の完了と農産物からの現物および貨幣と思われる租税徴収の終了、そして冬の90日[12月1日から3月1日]の到来とが結びついて生まれた名称)と呼ばれたこの進物と共に、いわゆる bokhchā(原義は包み)も送られた。これには衣装の他に種々の砂糖菓子が含まれていた。Chang bastī という名の贈物も(アミールが旅行から帰還した時に)送られた(原義はほこりおさえ)。このような贈り物に加えて、(租税以

外に)巨額の金銭も送られた。Tartuq と贈り物は通例、租税徴収官 *amlakdār* やハーキムによってアミールに送られたが、私的な個人、大商人(ムスリムと並んでユダヤおよびヒンドゥー商人)、手工業者などが進呈することも珍しくはなかった¹²⁸⁾。

【第9部】 教育と宗教に関するすべての文書がここに分類されている。この部の文書は、マドラサのムダッリス、地区モスクに付属するマクタブの教師、ムアッジン(モスクの職員；礼拝への呼びかけアーザーンを行う)、ハティーブ(預言者とその家族、統治者を讃えるフトバの読み手)、マフスラー・ハーン(コーラン読み)、ワクフのムタワッリー、イマームなどの欠員と任命の件を扱っている¹²⁹⁾。

若干の文書は改宗、つまりブハラユダヤ教徒やヒンドゥー教徒のイスラムへの改宗に関わるものである。ここには有名なナクシュバンディー教団のシャイフ Bahā' al-Dīn の系図を掲げた文書もある。また、この部の公文書の中には、アミール国内の地区モスクと大モスクのリスト、ワクフ収入や奨学金(*vazīfe*)、国庫の *dahyak*¹³⁰⁾の給付を受けているマドラサのムダッリスと学生のリストがある。

ここにはまた、19世紀後半から20世紀初頭のブハラにおける、ペテルブルクやカザン、タシュケント、イラン、トビリシでアラビア、ペルシア、そしてトルコ語で印刷、刊行された出版物の普及に関する文書があることを付け加えておこう¹³¹⁾。

【第10部】 最後の第10部には、ブハラの支配人士の手紙や往復書簡が集められている。とくに興味深いのは、アミール国における租税改革の必要性を述べた書簡である(当文庫の2474号文書)。ここには、Āstānaquli Qoshbegi が1920年[1910年の誤りか]ブハラに起こったスンナ派對シーア派の虐殺事件について最後のアミール宛に書き送った手紙もある。自身シーア派であるコシュベギは、自分はこの事件には関与していないことを強調している。それでも、この事件に連座して、Āstānaquli は解任された。

もっとも注目されるのは、1918年の2-3月にコレソフ[当時のトルキスタン・ソビエト人民委員会議長]がブハラに行なった不成功で無為な遠征に関する文書である。この愚かな行動のために、多くの指揮官、赤軍兵士、共産主義者、そして青年ブハラ人の生命が失われたのである。

分類登録作業を終えてから、新たに37冊の大型台帳(*daftar*)が発見された。極秘とされたこれらの台帳は、ブハラ・アミール国の年毎の収支計算を示しており、総計7,200葉に

及んでいる。これからはアミール国最後の40-50年間の国家予算を正確に知ることができる。

以上がコシュベギ文庫の内容に関する簡単な試論である。コシュベギ文庫文書を使わずして、後期封建制期、同じく19世紀から20世紀初頭のウズベキスタンの歴史を学問的に再構成することは不可能であるにもかかわらず、この貴重な文書群はこれまで研究者の注意を引かなかった。

われわれの考えるに、コシュベギ文庫の研究は重要な意味を持っている。とりわけ、ソ連邦共産党中央委員会の決議、「社会科学の一層の発展と共産主義建設におけるその役割の上昇に関する方策について」を見れば歴然であろう。そこでは「社会科学的研究における文書基盤のさらなる拡大」の必要性が強調されているからである¹³²⁾。この決議と中央委員会のその他の指示は、学術研究における事実の重要性、また「個々の事実ではなく、当該の問題に関わる事実の総体を一つの例外もなく取り上げる」ことの必要性に関するレーニンの規定に基づいている¹³³⁾。

注

- 1) Бартольд 1973a : 118.
- 2) Бартольд 1973b : 357.
- 3) Там же.
- 4) Беляев 1909 : 45-48.
- 5) Бартольд 1973b : 359.
- 6) Бартольд 1896 : 58-59.
- 7) Крачковский 1940 : 3.
- 8) *Согдический сборник*, Москва-Ленинград, 1934, 52-90.
- 9) *Из архива шейхов Джуйбари, Материалы по земельным и торговым отношениям Средней Азии в XVI в.*, Москва-Ленинград, 1938 (С предисловием Е. Э. Бертельса); Иванов 1954.
- 10) Иванов 1940 ; Юлдашев 1966.
- 11) Троицкая 1968 ; Она же 1969.
- 12) Чехович 1954 ; Она же 1965.
- 13) Набиев 1959 ; Он же 1964 : 87-97.
- 14) Мукминова 1966.
- 15) Абдураимов 1961 ; Он же 1966 ; Он же 1968.

- 16) Петрушевский 1940 ; Он же 1948 ; Он же 1951.
- 17) Вяткин 1909 ; Он же 1912 : 76-93.
- 18) Семенов 1929 ; Он же 1954.
- 19) Абдураимов 1972 : 137-138.
- 20) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. No.1-2656.
- 21) ЦГА УзССР, ф. И-323, оп.1. ед. хр. 1429/16.
- 22) これは、かつてブハラ人民共和国教育人民委員および非常委員会副議長を務めていた M. サイジャノフが、アミール国の崩壊後に作成した一部の文書に関する最初の目録メモの中で述べられている。彼については、次の拙稿を参照。Abdu'raimov 1972. この点は、やはり元ブハラ人民共和国非常委員会のメンバーであった前記の K. ウバイドゥッラーエフも確認している。
- 23) Андреев/Чехович 1972 : 18.
- 24) Семенов 1957 : 210-215 ; Muḥammad Vafā' Karmīnagī, *Tuḥfa-yi khānī*, ркп. ИВ АН СССР, С-581, л. 1686 ; Епифанова 1962 : 123 ; Maktūbāt, рук. ИВ АН УзССР, No. 289, л. 1336 ; Абдураимов, 1966 : 75-81.
- 25) Семенов 1948 : 139.
- 26) 「タタル語(テュルク語——筆者)からの借用語で、非定住民からなるザボロージェ・コサック軍の本営も kosh と呼ばれた。しかし、これはいつでも場所から場所へと移動させることができた」Будагов 1871 : 82-85 ; 「qosh(チャガタイ語)は、本営、宿営、軍隊 ; qoshbegi はブハラの首相。qosh aghasi は(本営の)司令官」Радлов 1899 : 636.
- 27) Абдураимов 1963 : 15 [また Абдураимов 1974 : 54-60 も参照]
- 28) *Mazhar al-Ahvāl*, ркп. ИВ АН УзССР, No. 1936, л. 1-177.
- 29) *Материалы по истории таджиков и узбеков Средней Азии*, вып. 2 ; Семенов 1954 : 53-54 ; Крестовский 1887 : 289, 370.
- 30) Бартольд 1963a : 279.
- 31) Абдураимов 1963 : 181.
- 32) Бартольд 1963a : 279 ; Вяткин 1899.
- 33) Д. Г. Вороновский, *Гульшан ал-мулук*, соч. Мухаммад Якуба Бухари, канд. диссертация в ркп., Ташкент, 1948, стр. 261 ; Mīrzā 'Abd al-Azīm Sāmī, *Tuḥfa-yi Shāhī*, рукопись ИВ АН УзССР, No. 2091, л. 61a ; Hājī Muḥammad Nakīmkhān ibn Sayyid Ma'sūmkhān, *Muntakhab al-Tavārikh*, рукопись ИВ АН УзССР, No. 592, л. 92 и сл..
- 34) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1-207.
- 35) その主な職務は、アムラーク(国有)地を小作に貸し与え、そこから土地税を徴収することであった。Amlākdār がハーキムや徴税官を兼ねることもあった。

- 36) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 2204, л.1-78.
- 37) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1, л. 6.
- 38) Там же, ед. хр. 1, л. 30-37.
- 39) Уラクの称号は、(セイイド出身の)有力な聖職者に付与された。この称号の保有者は以前は軍隊の中でムフタシブ(ライース)の職務を果たしていたが、この時代になると、それはどのような職務とも関係を持たない尊称となっていた。ただし、前記の職務のいずれかを委任されることはあった。
- 40) コシュベギを除いて、ブハラの mīr(amīr)あるいは bek(biy)はすべて、amārat panāh(アミール国の拠り所)と称されていた。
- 41) Jebachi の原義は、甲冑兵。
- 42) Tash(ウズベク語), sang(タジク語), farsakh(ペルシア語 farsang のアラビア語形)は不特定の距離単位で、およそ 7-8 km。
- 43) 残念ながら、多くの文書でそうであるように、この文書にも年月は記載されていない。
- 44) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1, л. 37. ほふられた動物の肉を生そのままで分配する慣習は最近までであった。こうした儀礼は、家族の息災、除厄のために犠牲祭などの宗教的な祝祭のときに見られた。
- 45) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 32, л. 4. Дата 1891-1892. elbegi は部族の統率者(テュルク語 el, 複数形 elat は部族, 民族の意)。Şudūr は聖職者で、中世この職にある者はブハラ領外にあるワクフの登録と監督を行った。当該の時代にはたんなる名誉職であった。Tūqsāba は、もともと自身の軍旗(tūgh あるいは tūq)を保有する部隊の長。Mīrākhūr は司馬頭。Qaraul begi は警備隊長。
- 46) Aghaliq, 正しくは el aghasi は、キルギスの agha manap やカザフの aul aghasi に相当し、氏族の長老、氏族や共同体の影響力のある人物を意味する。Будагов 1869 : 60 ; Радлов 1893 : 143-144 ; Баргольд 1963b : 534.
- 47) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 31, л. 8.
- 48) Абдураимов 1966 : 103-104 ; Он же 1970 : 13-14, 26.
- 49) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 25, л. 35.
- 50) 現在はブハラ県バブケントの中心都市で、ブハラ市の北東25kmにある。
- 51) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 22, л. 4.
- 52) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 23, л. 46.
- 53) Волин 1941 : 111-126 ; Винников 1940 : 3-22.
- 54) Семенов 1948 : 142.
- 55) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 14, л. 1.

- 56) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 36, л. 1.
- 57) Джзьяはコーランが異教徒に定めた唯一の税である。
- 58) Бартольд 1963a : 374.
- 59) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 34, л. 1 и сл.
- 60) Там же.
- 61) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 35, л. 1.
- 62) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 576(文書は56葉).
- 63) 請願書の日付は, 1919年1月14日と1920年9月14日。
- 64) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 576, л. 38-41, 42-43.
- 65) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 26, л. 118.
- 66) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 11, л. 5.
- 67) Семенов 1954 : 41.
- 68) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 183-586.
- 69) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 188, л. 33, 37. [最近, コシュベギ文庫などの文書史料を使って19世紀ブハラに於ける奴隷制度を分析した研究が発表された。T.Fäyziev, *Buhara feodal jamiyatida qullardän faydalanishgä dair hujjätlär (19 äsr)*, Tashkent, 1990.]
- 70) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 191, л. 1.
- 71) Там же, ед. хр. 192, л. 1.
- 72) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 191, л. 1.
- 73) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 197, л. 1-3.
- 74) Там же, л. 4. 文書の印には, Jurabek qoshbegi の名がある。
- 75) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 197, л. 5.
- 76) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 197, л. 10.
- 77) Там же, л. 6.
- 78) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.31. ед. хр. 1135, л. 18.
- 79) *Восстание 1916 г. в Средней Азии и Казахстана, Сборник документов*, Москва, 1960, стр. 161.
- 80) ЦГА УзССР, ф. 1, оп.31. ед. хр. 1135, л. 18.
- 81) Султанов 1973 : 26, 34, 46, 57-58.
- 82) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1130-1504.
- 83) Aḥmad Makhdūm-i Dānish 1960b : 163.
- 84) Терентьев 1906 : 510.
- 85) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 200, л. 1.

- 86) Schuyler 1876 : II-308.
- 87) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1139, л. 1-7.
- 88) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1152, л. 1, 2.
- 89) Там же, л.2.
- 90) Там же, ед. хр. 1154, л. 1-2.
- 91) Там же, ед. хр. 1150, л. 1. [駐露公使西徳二郎は、1880年9月中旬にブハラを訪れている。西はこの間にアミール Muzaffar に拝謁して日本との通商について下問を受けたほか、ブハラの王城内でたしかにコシュベギと面会している。[王城の]「内ニ王ノ大臣「クシベギ」ト申スモノ當時留守番トシテ居住シ之レトモ両度面会致候此「クシベギ」ハ「ブカラ」中篇一ノ見識アル人ト承リ居シカ凡ソ年頃七十位ノ老翁ニシテ醇厚ノ風アリ接對向等届キシ人ニテ御坐候當人ハ本「ペルシヤ」出處ノ人ニテ久シク當時ノ「ブカラ」王ニ事ヘ餘程功アル人ニシテ王ノ信任ヲ受ケ當時宰相ノ職位ニ居候、「西書記官中亞細亞旅行報告書」『日本外交文書』14巻, 明治14年, 478頁。]
- 92) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1168, л. 1.
- 93) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1167, л. 36.
- 94) Там же, ед. хр. 1275, л. [欠落], ед. хр. 1274, л. 1.
- 95) Там же, ед. хр. 1158, л. 1.
- 96) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 595(25 документов), 596(8 док.), 622(24 док.), 652(75 док.), 673(34 док.), 724(4 док.), 725(4 док.), 726(2 док.), 727(1 док.).
- 97) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 969(123 док.), 971(142 док.), 975(185 док.).
- 98) Ахмад Дониш 1960a : 118.
- 99) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 203, л. 1. ヴァガンジーは、ブハラ県クズル・テベ郡の大村。
- 100) 1 コシュの面積は50タナーブに等しく、1 タナーブはおよそ60m×60mの広さである。
- 101) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 592, л. 1. ラカイはウズベクの一部族。文書には1304/1896-97年とある。
- 102) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 764, л. 2 ; ед. хр. 765, л. 1-3.
- 103) Ефремов 1786 : 33-34, 70-73.
- 104) Семемов 1954 : 60 ; ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1526, л. 2.
- 105) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1531, л. 1-12.
- 106) Абдураимов 1961 : 22-23.
- 107) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1576, л. 36.
- 108) Там же, ед. хр. 1566, л. 14.
- 109) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1682(в деле имеются 98 док.)

- 110) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1682, л. 27.
- 111) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1654, л. 94, 104.
- 112) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1897, л. 26.
- 113) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1909, л. 1.
- 114) Там же, ед. хр. 1912, л. 2.
- 115) Там же, ед. хр. 1913, л. 1.
- 116) Там же, ед. хр. 1897, л. 15.
- 117) Там же, ед. хр. 1900, л. 9-10.
- 118) Там же, ед. хр. 1885, л. 1-7.
- 119) Баргольд 1964 : 212.
- 120) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1885, л. 8.
- 121) Mīrzā Sādiq の伝記資料について詳しくは, *Tuḥfat al-Aḥbāb*, рукопись ИВ АН УзССР, №.59/III, Литограф. изд., Ташкент, 1914, стр. 162-163.
- 122) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1893, л. 1.
- 123) Садриддин Айни 1960 : 105.
- 124) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1891, л. 1-6 ; ед. хр. 1889, л. 7.
- 125) Там же, ед. хр. 1887, л. 1.
- 126) Там же, ед. хр. 1892, л. 1.
- 127) Там же, ед. хр. 2326, л. 1-2.
- 128) Там же, ед. хр. 1824, л. 1-2.
- 129) Там же, ед. хр. 2395, 2397, 2401.
- 130) Dahiyaq の原義は十分の一。アラビア語のウシュル (収穫に対する十分の一税) とは関係がない。若干のワクフ資金は国庫に入り, その十分の一が奨学金として学生に支給された。
- 131) ЦГА УзССР, ф. И-126, оп.1. ед. хр. 1699, л. 1 ; ед. хр. 1952, л. 1 ; ед. хр. 1953, л. 1.
- 132) *Правда*, 22 VIII 1967.
- 133) В. И. Ленин, Соч., изд. 4, т.32, стр. 267.

参考文献

Абдурайимов, М. А.

- 1961 *Вопросы феодального землевладения и феодальной ренты в письмах эмира Хайдара, Опыт краткого исследования источника*, Ташкент.
- 1966 *Очерки аграрных отношений в Бухарском ханстве в XVI-первой половине XIX века*, т. 1, Ташкент.
- 1968 *Малоизвестный источник по истории аграрных отношений в Бухаре в XVI в.*,

- Народы Азии и Африки*, 1968, No.3.
- 1970 *Очерки аграрных отношений в Бухарском ханстве в XVI-первой половине XIX века*, т. 2, Ташкент.
- 1972 Научное наследие М. Саиджанова, *Шарк юлдузи*, 1972, No.9.
- 1974 Кошбеги, а не кушбеги (К истории установления власти кошбеги в Бухарском ханстве), *Общественные науки в Узбекистане*, 1974, No.11, стр.54-60.
- Андреев, М.С./Чехович, О.Д.
- 1972 *Арк(Клемль)Бухары в конце XIX-начале XX в.*, Душанбе.
- Ахмад Дониш(Ahmad Makhdūm-i Dānish)
- 1960a *Путешествие из Бухары в Петербург, Избранное*, Сталинабад[Душанбе].
- 1960b *Risāla yā mukhtaṣarī ta'rikh-i saltanat-i khānadān-i manghūtiya*, Basa'ī u ihtimām u taṣḥīh-i 'Abd al-Ghanī Mīrzāyif, Istālinābād [Душанбе].
- Бартольд, В.В.
- 1896 Об одном историческом вопросе, *Среднеазиатский вестник*, Ноябрь, Ташкент.
- 1963a История культурной жизни Туркестана, *Сочинения*, т. 2, ч. 1, Москва.
- 1963b Киргизы, Исторический очерк, *Сочинения*, т. 2, ч.1, Москва
- 1964 Мир Али-Шир и политическая жизнь, *Сочинения*, т.2, ч.2, Москва.
- 1973a Об одном уйгурском документе, *Сочинения*, т.8, Москва.
- 1973b Хранение документов в государствах мусульманского Востока, *Сочинения*, т.8, Москва.
- Беляев, И.А.
- 1909 Материалы для изучения среднеазиатской палеографии по юридическим актам XVII-XVIII вв., *Протоколы заседаний и сообщения членов Туркестанского кружка любителей археологии*, год XI.
- Будагов, Л. З.
- 1869 *Сравнительный словарь турецко-татарских наречий*, т. 1, Санктпетербург.
- 1871 —, т. 2, Санктпетербург.
- Винников, И. Н.
- 1940 Арабы в СССР, *Советская Этнография*, т. 4.
- Волин, С. А.
- 1941 К истории среднеазиатских арабов, Труды 2-й сессии арабистов, *Труды ИВ АН СССР*, вып. 36, Москва-Ленинград.
- Вяткин, В. Л.
- 1899 Из области истории, *Туркестанские ведомости*, 1899, No.32.

- 1909 Материалы к исторической географии Самаркандского вилайета, *Справочная книжка самаркандской области*, вып. 7, стр. 1-83.
- 1912 Отчет о раскопках обсерватории Мирза Улуг-бека в 1908 и 1909 годах, *Известия Русского комитета для изучения Средней и Восточной Азии...*, сер. II, No. 1, СПб.
- Епифанова, Л. М.
- 1962 Мирза Абдалазим Сами, *Тарих-и Салатин-и Мангитийа (История мангытских государей)*, Издание текста, предисловие, перевод и примечания Л. М. Епифановой, Москва.
- Ефремов, Ф.
- 1786 *Российского унтер-офицера Ефремова десятилетнее странствование и приключение в Бухарии, Хиве, Персии и Индии и возвращение оттуда чрез Англию в Россию, писанное им самим*, СПб., 1786 ; нов. изд. Москва, 1950.
- Иванов, П. П.
- 1940 *Архив хивинских ханов XIX в. (Исследование и описание документов с историческим введением), Новые источники для истории Средней Азии*, Ленинград.
- 1954 *Хозяйство джуйбарских шейхов, К истории феодального землевладения в Средней Азии в XVI-XVII вв.*, Москва-Ленинград.
- Крачковский, И. Ю.
- 1940 Предисловие [к книге П.П.Иванова, *Архив Хивинских ханов XIX в.*]
- Крестовский, В. В.
- 1887 *В гостях у эмира бухарского*, СПб..
- Мукминова, Р. Г.
- 1966 *К истории аграрных отношений в Узбекистане XVI в., По материалам "вакф-наме"*, Ташкент.
- Набиев, Р. Н.
- 1959 Новые документальные материалы к изучению Института "Суюргал" в Фергане XVI-XVII вв., *Известия АН УзССР*, 1959, No.3.
- 1964 Источники по истории крепостного права в Средней Азии, *Археографический ежегодник 1963*, Москва.
- Петрушевский, И. П.
- 1940 Персидские официальные документы XVI-начала XIX в. как источники по истории феодальных отношений в Азербайджане и Армении, *Проблемы источниковедения*, т. 3, Москва-Ленинград.

- 1948 К вопросу о подлинности переписки Рашид ад-дина, *Вестник Ленинградского Университета*, 1948, No. 9.
- 1951 Феодалное хозяйство Рашид ад-дина, *Вопросы истории*, 1951, No. 4.
- Радов, В. В.
1893/1899 *Опыт словаря тюркских наречий*, т. 1-2, СПб..
- Садриддин Айни
1960 *Воспоминания*, Москва-Ленинград.
- Семенов, А. А.
1929 *Очерк поземельно-податного и налогового устройства Бухарского ханства*, Ташкент.
1948 Бухарский трактат о чинах и об обязанностях носителей их в Средневековой Бухаре, *Советское востоковедение*, т. 5.
1954 *Очерк устройства центрального административного управления Бухарского ханства позднейшего времени*, Сталинабад.
1957 Мир Мухаммад Амин-и Бухари, *Убайдулла-наме*, русск. пер. А.А. Семенова, Ташкент.
- Султанов, Ю.
1973 *Хамза, Очерк жизни и творчества*, Ташкент.
- Терентьев, М. А.
1906 *История завоевания Средней Азии*, т. 1, СПб..
- Троицкая, А. Л.
1968 *Каталог архива кокандских ханов XIX века*, Москва.
1969 *Материалы по истории Кокандского ханства XIX в., По документам архива кокандских ханов*, Москва.
- Чехович, О. Д.
1954 *Документы к истории аграрных отношений в Бухарском ханстве*, вып. 1, *Акты феодальной собственности на землю XVII-XIX вв.*, Подбор документов, перевод, введение и прим. О.Д. Чехович, Ташкент.
1965 *Бухарские документы XIV в.*, Ташкент.
- Юлдашев, М. Ю.
1966 *К истории крестьян Хивы XIX в.*, Ташкент.
- Schuyler, E.
1876 *Turkistan, Notes of a Journey in Russian Turkistan, Khokand, Bukhara, and Kuldja*, vol. 2, London.